

結婚生活と人生における不当な苦しみ——そしてキリストの模範 第一ペテロ 3 章 1-22 節

ロバート・D・ルギンビル博士

<https://ichthys.com/Pet35.htm>

からの抜粋翻訳

I. 第一段落(1-7 節)

(1) 同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。それは、たとえ彼らの中に[現在]神の御言葉に従っていない者がいても、妻であるあなたがたの神にかなった行いによって、あなたがたが何も言わなくても、彼らが[信仰へと]導かれるためである。(2) 彼らは、あなたがたが[彼らに対して]敬意をもって示す清い行いを見続けているからである。(3) このことに関して、髪型を整えること、宝石を身につけること、衣服を着飾ること[に過度に心を奪われること]など、外見を[最優先に]してはならない。(4) むしろ、慎み深く穏やかな霊をもって(すなわち、霊的真理を正しく適用することによって)、心の内なる人(すなわち、霊的成長)に[心を向け]なさい。これこそ、神の目にははるかに価値のあるものである。(5) 実際、昔、神に望みを置いていた信仰深い(字義的には、聖別された、または聖なる)女性たちは、このようにして、すなわち、自分の夫に従うことによって、自らを飾っていたのである。(6) ちょうどサラがアブラハムに従い、彼を「主」と呼んだようにである。あなたがたも、[正しい動機から]正しいことを行い、脅しに対する恐れからそうするのでないなら、彼女の[真の]子供となったのである。(7) 同じように、夫たちよ、[聖書の]知識に従って妻と共に生活しなさい(すなわち、妻を正しく扱うことについて、聖書が言葉と模範によって教えていることに従って)。
[女性として]より弱い者である妻に対して、[ふさわしく]接しなさい。[夫であるあなたがたは]、[永遠の]命の恵みを共に受け継ぐ者として、妻に[ふさわしい]敬意を払わなければならない。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためである(すなわち、この点で罪を犯すことによって祈りが損なわれないためである)。
([第一ペテロ 3 章 1-7 節](#))

結婚生活におけるクリスチャンの妻の責任(1-2 節):

(1) 同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。それは、たとえ彼らの中に[現在]神の御言葉に従っていない者がいても、妻であるあなたがたの神になつた行いによって、あなたがたが何も言わなくても、彼らが[信仰へと]導かれるためである。(2) 彼らは、あなたがたが[彼らに対して]敬意をもって示す清い行いを見続けているからである。(第一ペテロ 3 章 1-2 節)

この箇所の初めにあたって、私たちは次のことを思い起こす必要があります。男女の関係や結婚に関する問題は、ほとんどの人にとって最重要事とまでは言わないにしても、最も重要と考えられている事柄の中で非常に高い位置を占めています。しかし、神の観点からすれば、この人生で本当に重要なのは、救い、霊的成長、霊的前進、そして霊的な実を結ぶことです。この人生は、実のところ、すべてイエス・キリストを中心とするものです。このことが不信者についてさえ真実であるなら——そして実際そうなのです。なぜなら、彼らも最後には主を認め(イザヤ 45 章 23 節; ローマ 14 章 11 節; ピリピ 2 章 10 節)、最後には主によって裁かれるからです(マタイ 25 章 31-46 節; ヨハネ 5 章 25-29 節; ヘブル 9 章 27 節; 黙示録 20 章 11-15 節)——少なくとも主を愛し、尊び、主が私たちに行うよう望んでおられることを何よりも大切にしていると告白する信者にとっては、なおさら真実です。

(17) 神の家から始めて、裁きが始まる時が来たからである。そして、それがまず私たちから始まるのなら、神の福音を信じない者たちの最後はどうなるであろうか。(18) [こう書かれているように]「義人でさえ、かろうじて救われるのであれば、神を敬わない者や罪人は、どこに身を置くことができようか」(箴言 11 章 31 節)。(第一ペテロ 4 章 17-18 節)

そうである以上、神の御言葉から与えられるすべての教え、すなわち、生ける神の御言葉であられる方ご自身の御思い(第一コリント 2 章 16 節; 黙示録 19 章 13 節)は、あらゆる点で私たちの益となるために与えられており、この人生で本当に重要なことを前進させるためのものであって、ある人をほかの人より、ある集団をほかの集団より、ある性をほかの性より優遇するためのものではない、と考えるのが当然です。このように、ある人や集団、ある性をほかより優遇しようとする考え方は、この世的な考え方、政治的な考え方であり、今日の私たちの文化に広く行き渡っている誤った態度に基づく感情的な考え方です。男性であれ女性であれ、異邦人であれユダヤ人であれ、既婚者であれ独身者であれ、若者であれ年配者であれ、すべての信者が願うべきことはまったく同じです。すなわち、まだ救われていないすべての人が救われること、そしてキリストにあるすべての兄弟姉妹が、可能な限り最大限に霊的に成長し、前進し、実を結ぶことです。

ユダヤ人も異邦人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。[\(ガラテヤ 3 章 28 節\)](#) /NIV 訳)

イエス・キリストに最大限の栄光を帰すること——すべての信者が正しく応答することによって達成されるもの——は、キリストのからだのすべての部分が、それぞれの正しい働きを果たすことによってのみ可能です。聞くことを拒む耳や、歩くことを拒む足があれば、人間の体において、その機能は確かに大きく損なわれます。キリストのからだにおいては、なおさらそうです。なぜなら、この世でクリスチャンとしてふさわしくない振る舞いをしている人は、一方では自分自身のあらゆる霊的活動をも妨げられ、他方では、自分と関わりを持つほかのすべての信者をも妨げることになるからです。そして、その関わりが深く親密であればあるほど、その好ましくない振る舞いがもたらす害も大きくなります。

しかし、そのような人々[結婚する人々]は、肉において苦難を受けることになる。私は、あなたがたをそれから免れさせたいのである。[\(第一コリント 7 章 28 節 後半\)](#)

[夫であるあなたがたは]、[永遠の]命の恵みを共に受け継ぐ者として、妻に[ふさわしい]敬意を払わなければならない。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためである(すなわち、この点で罪を犯すことによって祈りが損なわれないためである)。[\(第一ペテロ 3 章 7 節\)](#)

結婚生活における不和は、結婚している人ならだれでも知っているように、平安を大きく損なうものです。そして、私たちは平安へと召されています([第一コリント 7 章 15 節](#))。なぜなら、主と共に平安のうちに歩むこと、すなわち、自分自身の働きをやめ、代わりに完全に主に信頼する「信仰による安息」こそが、御霊の新しい時代である教会時代における第四戒<参照:「出エジプト記 20 章 8-11 節」にある第四番目の戒律「安息日を覚えて、これを聖とせよ」>の成就だからです([ヘブル 4 章 9-10 節](#); [イザヤ 26 章 3 節](#), [57 章 2 節](#); [ヨハネ 14 章 27 節](#); [ローマ 5 章 1 節](#); [エペソ 2 章 14 節](#); [ピリピ 4 章 7 節](#); [コロサイ 3 章 15 節](#); [第二テサロニケ 3 章 16 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#)参照)。このこと、すなわち、私たちの霊的成長、前進、そして実を結ぶ働きを最大限にすること(そのためには、平安が前提条件として必要です)こそが、御霊によってペテロがここで結婚生活における権威の問題について述べている理由であって、一方の性を他方の性を犠牲にして有利にするためではありません。

実際、聖書は結婚という問題を、世俗社会におけるほとんどすべての扱い方とは異なる仕方で扱っています——そして残念ながら、多くの説教や教会の教えにおける扱い方とも異なっています。聖書において、結婚は、この人生で幸福を得るための手段というよりも、むしろ残念ながら必要となるものとして描かれています。クリスチャンの女性たちに正しいことを行うよう勧める中で、ペテロはその後、聖書に登場する有名な信仰の女性たちを引き合いに出します。それについては実際、以下(5-6 節)で取り上げますが、ここで注目すべき重要な点は、そのような結婚のうち、「いつまでも幸せに暮らしました」といった、現代文化に見られる理想的な結婚にまつわるロマンチックな幻想によって表現できるものは、ほとんどないということです。私たちは、アブラハムとサラの間にさまざまな問題があったことを知っています。リベカもまた、ヤコブが当然受けるべき祝福を受けるために、息子が夫を欺くのを助けなければなりませんでした。また、ヤコブが幸せな結婚生活を送っていたなどと、だれが言えるでしょうか(四度もその機会があったにもかかわらず)。ハンナは偉大な信仰者でしたが、幸せな結婚生活を送っていたわけではありません。ダビデの妻たちのうち、彼と親密で満ち足りた関係を持っていたと思われる者は一人もおらず、最初の結婚はよく知られているように悲惨なものでした。このほかにも例を挙げることはできます。これらをはじめとする聖書の多くの例がはっきり示しているのは、結婚はしばしば必要なものではあるものの([第一コリント 7 章 2 節](#))、人生のあらゆる問題や願望を解決してくれるすばらしい手段としてではなく、むしろ現実的に聖書の中で描かれているということです。私たちが言えるのは、これらの敬虔な人々の大部分は、夫も妻も同様に、結婚がもたらす試練や苦難にもかかわらず、自分の人生に対する神のご計画を果たすことができ、また互いにそれを果たせるよう助け合ったということです。神の目に良い結婚とは何かについて、これ以上に優れた聖書的な定義はありません。すなわち、夫と妻が、神からそれぞれに与えられた役割を互いに支え合い、私たちすべてがこの世にいる本来の目的——霊的に成長し、ますます主に近く歩み、そして一人一人にそれぞれ与えられている個人的な奉仕を果たすこと——を成し遂げることです。

この観点から、ペテロは男女双方に、結婚という制度によってそれぞれに課せられた責任を受け入れ、それを果たすよう勧めています。男性であれ女性であれ、神にかなった結婚がどうあるべきかについて、聖書が定めている枠組みを自分の都合で書き換えることはできません。聖書は双方に非常に明確な責任を与えています。そして、夫と妻の双方が、神から与えられたこれらの務めを受け入れ、互いを尊重し、神がそれぞれに与えられた役割を尊重して初めて、結婚生活が維持され、健全に営まれるために十分な平安が生まれ、また双方がイエス・キリストのために成長し、前進し、実を結ぶことができるのです。

なぜなら、私たちは皆、キリストの裁きの座の前に立たなければならないからである。それは、私たち一人一人が、この体を通して成し遂げたことに応じて、それが良いものであれ、価値のないものであれ、その報いを受けるためである。

([第二コリント 5 章 10 節](#))

これは男性にも当てはまります。女性にも当てはまります。この地上では、私たちには異なる役割があるかもしれませんが(実際、まったく同じ賜物の組み合わせを持つ信者は二人としておらず、主から与えられた「務め」もまったく同じものではありません)。しかし、私たちは皆、同じ原則のもとに歩んでいます。すなわち、自分を捨て、自分の十字架を負い、主に従うという、主から与えられた命令に従い、霊的に成長し、前進し、実を結ぶ中で、主のために行ったことに応じて、私たちは皆、報いを受けます。自分に与えられた賜物や奉仕に基づく役割や特定の務めについて不平を言うなら、結局のところ、害を受けるのは自分自身です。

たとえば、キリストのからだの中で、私たちが手ではなく足であることが、本当に問題でしょうか。どちらも必要です——そしてどちらにも、天における報いである三つの冠を勝ち取り、かの日に主から「よくやった！」と言っていただくための、十分に公平な機会が同じように与えられています。それこそが、私たちの本当の目標です——少なくとも、そうあるべきです。この地上における、個人的なものであれ一般的なものであれ、いわゆる不平等や不公平に心を奪われることは、無益なことです。なぜなら、結局のところ、今この地上において、私たちは皆、キリストと共に等しく相続人であり、立場上キリストと一つであるのと同じように、永遠においては、私たちは皆、実際に「一つ」となるからです。すなわち、もはや恨みも分裂も、しみも傷もない、完全で欠けるところのないキリストの花嫁となるのです。教会の一員として私たちは皆、永遠にイエス・キリストを十分に分かち持つという点で等しい者となります——しかし、この短い人生において、私たちの主人にどれほど忠実に仕えたかによって、明確な違いが生じることになります。

そして、繰り返して言わなければなりませんが、私たちすべて、すなわちすべての信者には、この世で置かれている状況がどれほど異なっていようと、最高の報いを得るための十分に公平な機会が与えられています。なぜなら、完全な裁き主である私たちの主は、私たちに与えられたタラントの大きさと、それに関係するあらゆる事情を考慮に入れてくださるからです。その中には、私たちが男性であるか女性であるかということや、この人生で割り当てられた役割も含まれます。ですから、私たちの置かれている境遇が、どれほど高く恵まれたものであろうと、どれほどつつましく低いものであろうと、宇宙を創造され、その正当な主であり主人である私たちの主が、この世でどのように振る舞うべきかについて正しい模範を示してくださったことを覚えておく必要があります。主

は、ご自分に当然与えられるべき誉れを要求することなく、かえってご自身を低くして、御父から与えられた使命を果たすよう、私たちに命じておられます——私たちを救うために主ご自身がそのように歩まれたようにです([第一ペテロ 2 章 21-23 節](#)参照)。

「[あなたがたの足を洗うことによって]私はあなたがたに模範を示した。それは、私があなたがたにしたように、あなたがたもするためである。」([ヨハネ 13 章 15 節](#); 参照:[ヨハネ 14 章 15 節](#), [14 章 23-24 節](#))

(5) あなたがたも、キリスト・イエスが持っておられたこの心構えを持つべきである。(6) キリストはすでにまさに神のかたちで存在しておられたので、神と等しいことは、[当然ながら]ご自分がかみ取らなければならないものとは考えられなかった。(7) それにもかかわらず、[すでに持っておられた神との同等の神性にもかかわらず]、ご自分の地位を捨て、しもべのかたちを取り、[そして]人間と同じ姿で生まれられた。(8) ご自分を低くし、死に至るまで、しかも[私たちすべてのための]十字架の死に至るまで従順になられた。([ピリピ 2 章 5-8 節](#))

(1) こういうわけで、私たちも[11 章の信者たちと同じように]、これほど大勢の証人たち[人間と天使たちの双方]に囲まれているのだから、あらゆる妨げとなるもの——特に、いつも私たちを悩ませる罪——を脱ぎ捨て、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走ろうではないか。(2) 私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエス(「アルファでありオメガ」と比較)に目を向けよう。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、十字架の恥をものともせず、それに耐え忍び、神の御座の右に着座された。([ヘブル 12 章 1-2 節](#))

私たちの主が、誇りをものともせず、私たちのために十字架の屈辱を耐え忍ばれたのであれば、私たちもまた、主がこの人生で私たちに割り当てられたものを、何であれ受け入れるべきではないでしょうか。主は「ご自分の前に置かれた喜び」を待ち望んでおられました([ヘブル 12 章 2 節](#))。そして私たちは、主の足跡に従うよう召されています。この人生で自分が正しいことを認めさせようとしたり、成功や地位を追い求めたりするのではなく、主の模範に従ったことについて主から良い評価をいただくことを尊び、願い、待ち望むべきなのです。このように、この世での評価や成功、地位ではなく、主に従って主から良い評価をいただくことを求める姿勢こそ、結婚や、結婚における権威と責任の問題を含め、この世のあらゆる事柄に対して信者が持つべき正しい見方なのです。

聖書は、ロマンチックな幻想ではなく、神にかなった現実という観点から結婚を扱っ

ています。聖書は、結婚を人生のあらゆる問題に対する答えとして示すどころか、結婚は重い負担であると教えています([第一コリント 7 章 32-35 節](#))。もともと、それはしばしば必要なものでもあります([第一コリント 7 章 2 節](#), [7 章 9 節](#))。妻には、神から夫に与えられた権威に応じる必要があるという制約がありますが([エペソ 5 章 22-24 節](#); [コロサイ 3 章 18 節](#))、夫には、指導する責任という重荷と、それに伴って妻を正しく扱わなければならないという責任があります([エペソ 5 章 26-28 節](#); [コロサイ 3 章 19 節](#); [第一ペテロ 3 章 7 節](#))。そして信者にとって、何よりも重要なのは、配偶者の霊的な益であるべきです。だからこそ聖書は、第一に、そもそも結婚を勧めておらず([第一コリント 7 章 1 節](#), [7 章 28 節](#))、第二に、結婚生活における摩擦を和らげようとしているのです([第一コリント 7 章 3-5 節](#); [第一ペテロ 3 章 7 節](#))。理想的には、霊的に成熟した夫と妻は完全なチームとなり、イエス・キリストとその教会のために、同じくびきを負って力を合わせて進んでいくことになります。しかし、それが実現するのは、夫婦双方が聖書から与えられている自分の務めと責任を、不平を言わず全面的に受け入れる場合だけです。

要するに、聖書的に一言でまとめるなら、妻は夫に対して、その権威に応じる敬意を示す責任があり、夫は妻に対して、責任をもって愛する義務があります。

(18)妻たちよ、主にある者にふさわしく、自分の夫に従いなさい。(19)夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対してつらく当たってはならない。([コロサイ 3 章 18-19 節](#) /NKJV 訳)

優れた下士官(NCO)は、自分の指揮官の指揮に心から従います。一方、優れた指揮官は、任務を遂行する必要性に次いで、部下の福利を何よりも心にかけています。いずれにしても、すべてのクリスチャンが第一に心に向けるべきなのは、まさにその任務です。だからこそ結婚は、その任務を果たすことを複雑にする可能性があります。特に、夫婦のどちらか一方がその任務を優先せず、定められた原則に従って行動しない場合には、なおさらです。そして、聖書が妻に課している、夫の権威に進んで応じるという責任があまりにも重く思われるなら、あるいは、聖書が夫に課している、妻を愛し、責任をもって配慮するという務めがあまりにも重荷に思われるなら、次のことを思い起こすとよいでしょう。結婚は選択であり、今日ではだれも結婚することを義務づけられてはいません。しかし、ひとたび結婚を選んだなら、夫にも妻にも聖書が定めている責任はきわめて明確なのです。

敬意をもって示される清く神にかなった行い：「御言葉に従っていない」未信者の夫たちは、このようにしてイエス・キリストへの信仰へと導かれるのです。すなわち、妻が

自分に対して示す良い、神にかなった行いを目の当たりにすることによってです——その行いは、妻が信者になる前に示していたものより、はるかに優れたものであるべきです。このように行いが劇的に良い方向へ変化し、それがあらゆる面で夫の益となり、しかもそれにふさわしい敬意が伴っているなら、その恩恵を受ける未信者の夫が心を動かされないはずはありません。もちろん、適切な機会がある時に、未信者の夫に福音を伝えることを怠ってはなりません。しかし、昔から「行動は言葉より雄弁である」と言われるように、ペテロがここで「あなたがたが何も言わなくても……彼らが[信仰へと]導かれるため」と述べている時、念頭に置いているのはまさにこの真理です。そして、この箇所は特に未信者の夫について語っていますが、信者である妻が真理に熱心になる一方で、同じく信者である夫がまだ生ぬるい状態にある場合にも、確かに当てはまります。妻の行いが目に見えて大きく良い方向へ変わるなら、妻が勧めている教えを夫の目に魅力あるものとするうえで、どれほど熱烈に言葉で勧めるよりも、大きな効果をもたらすでしょう。

……模範となる忠実さを示し、あらゆる点で、私たちの救い主である神の教えを美しく飾るためである。[\(テトス 2 章 10 節後半\)](#)

正しい優先順位 (3-4 節)：

(3) そのように自らを整えるにあたって、髪型を整えること、宝石を身につけること、衣服を着飾ること[に過度に心を奪われること]など、外見を[最優先に]してはならない。(4) むしろ、慎み深く穏やかな霊をもって(すなわち、霊的真理を正しく適用することによって)、心の内なる人(すなわち、霊的成長)に[心を向け]なさい。これこそ、神の目にははるかに価値のあるものである。[\(第一ペテロ 3 章 3-4 節\)](#)

これらの節の重要な意味は、しばしば見落とされています。ペテロは御霊によって、当時のクリスチャン女性たちに、外見は重要ではないと言っているわけではありません。むしろ、あらゆる時代のすべてのクリスチャン女性に対して、**外見**は、性別やその他この世のどのような事情にもかかわらず、すべてのクリスチャンが第一の目標とすべき**内面**の霊的成長、前進、そして実を結ぶこととは、比べものにならないほど重要性が低い、と言っているのです。またこの箇所は、クリスチャン女性が何を最も重要なものと考えべきかについても、非常にはっきりと示しています。それは、夫の願いや望み(あるいは、この世の文化一般が求めるもの)が私たちの霊的な目標に反する場合には、それらを第一にすること**ではなく**、イエス・キリストを喜ばせることです。イエス・キリストが望んでおられることを行うことによって、良い妻は、この人生において主に従うことを自

らも第一の優先事項としている良い夫に対して、正当で適切な従属という原則を果たすことになるのです。

夫も妻も、主のために霊的に成長し、前進し、実を結ぶことを最優先にしているなら、結婚生活の中で生じ得るその他のあらゆる対立も、はるかに容易に小さく抑え、解決することができるでしょう——なぜなら、夫婦双方が、相手も同じように成長し、前進し、実を結ぶことを熱心に願っているからです。しかし、利己的で霊的でない優先事項が入り込めば、それに応じて摩擦が生じ、霊的な前進も妨げられることになります。私たちのうち、完全な人は一人もいません。私たちは皆、癖や欠点、そしてほかの人をいら立たせるような性格上の特徴を持っています。私たちはそれらを抱えたまま結婚するのであり、結婚すれば、そのような問題が二人分になるということです。そして多くの場合、一方のそうした特徴は、もう一方のものとうまくかみ合いません。ですから、真に相手の霊的な最善を願っている二人の成熟した信者の結婚でさえ、夫婦の調和が試される時があります——そのような夫婦でさえそうであるなら、成熟していない人や、私たちクリスチャンの真の目的に十分に献身していない人の場合には、なおさらそうではないでしょうか。そのような時、結婚している信者は、相手がどのような態度を取ろうとも、自分自身に与えられた神にかなった責任を果たすことについて、主に対して責任を負っていることを覚えておかなければなりません。すなわち、妻は夫の権威に応じること(たとえ夫が間違っている場合でも——ただし、霊的な根本原則に反するところまで従うものではありません)、そして夫は妻を熱心に、愛をもって顧みること(たとえ妻が理不尽な態度を取っている場合でも——ただし、霊的な妥協をするところまでではありません)です。

(9) また、女たちには、慎み深く、節度と品位のある身なりをし、編んだ髪や金や真珠や高価な衣服で身を飾るのではなく、(10) 神を敬うことを公言する女にふさわしく、良い行いをもって身を飾ってほしい。(第一テモテ 2 章 9-10 節 /NIV 訳)

上の箇所では夫婦関係について何も述べられておらず、明らかに教会のすべての女性に向けて語られています。しかし、ここでパウロが述べている考えは、現在取り上げている箇所でペテロが述べていることと本質的に同じです。すなわち、女性にとって(既婚であれ未婚であれ)第一に心に向けるべきなのは、外見ではなく、内なる人、そして霊的な成長、前進、実を結ぶことにおいてイエス・キリストのために一人一人が励むこと(これらはすべて「良い行い」です)なのです。そして、この同じ原則は、クリスチャン男性にも(既婚であれ未婚であれ)等しく当てはまります。なぜなら、本当の戦いが繰り広げられているのは「心の内なる人」(第一ペテロ 3 章 4 節)においてであり、その

勝利は「慎み深く穏やかな霊をもって」初めて得られるものだからです。これは、成熟したクリスチャンの妻に外面的に現れる特徴は、実のところ、彼女が自分の態度に神の御言葉の真理を注意深く適用することによって、その心の中で起こっている良いことを映し出したものである、とペテロなりの言い方で述べているのです。そして、それこそ、すべての信者が常に行うべき正しい霊的真理の適用そのものなのです(もちろん夫たちも含まれます)。

聖書における先例(5-6 節)：

(5) 実際、昔、神に望みを置いていた信仰深い(字義的には、聖別された、または聖なる)女性たちは、このようにして、すなわち、自分の夫に従うことによって、自らを飾っていたのである。(6) ちょうどサラがアブラハムに従い、彼を「主」と呼んだようにである。あなたがたも、[正しい動機から]正しいことを行い、脅しに対する恐れからそうするのでないなら、彼女の[真の]子供となったのである。(第一ペテロ 3 章 5-6 節)

ペテロ自身も既婚者でしたから(第一コリント 9 章 5 節)、直前の 4 節で結婚しているクリスチャン女性に与えた聖書的な教えに対して、反発が起こることを予想していたようです。特に当時のローマの女性たちは、古代世界で一般的であった厳しい社会的制約からかなりの程度自由であり、自立していたことでよく知られていました。ですからペテロは、ここでの言葉が靈感によるものであるとはいえ、一部の人々にどのように受け取られる可能性があるかについて、十分承知していたようです。またペテロは、ここで妻たちに命じている夫への応答が、一方では未信者の夫をキリストへ導くという望ましい結果をもたらし、他方では未信者たちがクリスチャン女性の神にかなった行いを目にすることによって、キリストとキリストへの信仰全般に栄光を帰するという結果をもたらすためには、それが完全に自発的で心からのものでなければならないことも理解していました。このためであることは間違いないでしょうが、ペテロは御霊によって、このように夫に応じる姿勢は決して新しいものではなく、神を敬う信仰深い妻たちが昔から夫に対して取ってきた姿勢そのものであることを示すよう導かれています。

完全な夫が一人もいないように、たとえ最も優れたクリスチャンの夫であっても完全ではありません。そしてアブラハムも完全な夫ではありませんでした。飢饉のためにエジプトへ入った時、彼はパロに対してサラを自分の妻であるとは認めませんでした(創世記 12 章 13-20 節)。そして後にカナンでも、アビメレクに対して同じことを繰り返しました(創世記 20 章 2-18 節)。また、サラがまだ彼に跡継ぎを与えることができなかった時、彼女の女奴隷ハガルによって子供をもうけるというサラの提案を、あまりにも安易に

受け入れたように思われます。同様に、ハガルが身ごもった後には、サラがハガルを追いつけ出すままにすることにも、あまりにも簡単に同意しました([創世記 16 章 1-6 節](#))。ところが後にイサクが乳離れした時には、今度はハガルを追いつけ出すことに不当に抵抗しました([創世記 21 章 9-12 節](#))。

また、完全な妻が一人もいないように、たとえ最も優れたクリスチャンの妻であっても完全ではありません。そしてサラも完全な妻ではありませんでした。彼女は、子供をもうけることができないのはアブラハムのほうだと思い込んでいたようで、そのため彼をハガルと寝させるという計画を立て、ハガルが身ごもると、今度は恨みを抱いて、自分の競争相手となった彼女を追いつけ出すよう要求しました([創世記 16 章 1-6 節](#))。またサラは、息子を与えるという約束を受けた時にも、なかなか主を信頼することができませんでした([創世記 18 章 11-15 節](#))。

しかし、創世記の物語全体を通して見ると、アブラハムが全体としてサラに対して良い、愛情深い夫であったこと、そしてサラも夫に応じる良い妻であったことが分かります。さらに二人の関係のあり方の中に、クリスチャンの結婚の基準となるべきものとして、ペテロが御霊によって私たちに教えていることを見ることができます。すなわち、夫は妻を愛し、愛をもって責任ある行動を取る必要があります、妻は夫を敬い、夫に応じる態度を取る必要があるということです。そして旧約聖書全体を通して、真の信者たちについて見るなら、同じ型が繰り返し現れています。それは(夫婦のどちらについても)完全さではなく、ふさわしい愛と敬意なのです。

現代の私たちの観点からすれば、なぜクリスチャン女性がこのような結婚上の制約の下に自らを置きたいと思うのか、と尋ねるのは確かにもっともなことです。しかし、聖書が夫に求めていることを正しく理解するなら、それは男性についても同じです。そのことを弟子たちもはっきり理解していました。

(10) 弟子たちはイエスに言った。「夫と妻との関係がそのようなものであるなら、結婚しないほうがよい」。[\(マタイ 19 章 10 節\)](#) /NIV 訳)

ですから、ここでまず改めて強調しておくべきことは、結婚は聖書によって決して命じられては**いない**ということです。結婚は、神が全人類のために定められた制度ですが、それが完全な調和のうちに機能したのはエデンの園だけでした(しかも、私たちが皆知っているように、その調和さえ長くは続きませんでした)。しかし、結婚することを選ぶすべての人に対して、聖書の要求はきわめて明確です。夫は妻を愛し、それにふさわしく行動しなければならず、妻は夫を敬い、それにふさわしく行動しなければなりま

せん([エペソ 5 章 33 節](#))。

ほかの箇所でも述べたように、このような状況のもとでは、創世記における呪いの一部として女性に与えられた夫と子供を求める願いがなかったなら、選択の自由がある場合、大多数の女性が結婚することにそれほど積極的になるかどうかは疑わしいでしょう。¹ それでもなお、自分が従う側にならなければならないという不利な点が大きいのかかることは、認めてよいでしょう。もしこの世とこの人生が存在するすべてであったなら、昔の信仰深い女性たちが時折絶望に陥らなかったのはなぜなのか、と疑問を持っても不思議ではありません。ペテロは、彼女たちがそうならなかった理由を私たちに教えています。彼女たちは霊的な事柄に目を向けることによって、これから来るより良いものに望みを置いていたのです。「昔、**神に望みを置いていた女性たち**」と書かれているとおりです。というのも、男性にとっても女性にとっても、クリスチャンの真の目標は、この一時的な世において、今ここで自分の地位や成功や立場や物質的な境遇を向上させること**ではない**からです。私たちには、さらに高い望み、さらに優れた望みがあります([ヘブル 7 章 19 節](#); [ローマ 8 章 20-25 節](#), [15 章 4 節](#); [ガラテヤ 6 章 9 節](#); [エペソ 1 章 18 節](#); [コロサイ 1 章 27 節](#); [第一テサロニケ 1 章 3 節](#); [ヘブル 6 章 18-20 節](#), [11 章 6 節](#); [第一ペテロ 1 章 3-5 節](#)参照)。私たちは、この人生で主イエス・キリストにどれほどよく応えたかに基づいて与えられる永遠の報いを待ち望んでいるのです。私たちは、主イエス・キリストから「よくやった!」と言っていただくことを待ち望んでいるからです([マタイ 25 章 23 節](#); [ルカ 19 章 17 節](#))。

しかし、あなたがたに知ってほしい。すべての男のかしらはキリストであり、妻のかしらはその夫であり、キリストのかしらは神である。([第一コリント 11 章 3 節](#) /ESV 訳)

私たちは皆、この現在の人生において権威の下にあります——そしてすべてのクリスチャンは、何よりもまずイエス・キリストの権威の下にあります。夫が妻に対して持つ権威であれ、牧師・教師が自分の群れに対して持つ権威であれ、あるいはこの世で人が就くその他どのような権威ある立場であれ、ほかの人々を自分の権威の下に置くことは、外から見れば特権のように思えるかもしれませんが。しかし実際には、どのような権威ある立場にも重大な責任が伴います……それを神にかなった仕方で行使するのであれば。ほかの権威関係について以前論じた際(このシリーズの前回)にも見たように、神によって定められたあらゆる権威の目的は、救いと霊的成長のために、秩序ある枠

¹ [「Bible Basics 3A: Biblical Anthropology\(聖書の基礎 3A:聖書的人間論\)第 IV 部 3「裁き」<英文>を参照下さい。](#)

組みと十分な自由を提供することです。結婚や家庭についても同じです。平安と良い秩序がなければ、夫であれ、妻であれ、子供であれ、家族のだれも霊的に大きく前進することは難しいでしょう。ですから、イエス・キリストを信じるすべての者は、個人的な願望やあらゆる利己的な考えを越えて、その代わりに、より大きな全体像、すなわちイエス・キリストの教会を建て上げることに目を向けるべきなのです。

彼を「主」と呼んだこと：ペテロが、妻が夫に正しく従うことの例として挙げているのも、示唆に富んでいます。サラは、自ら進んでアブラハムにこの敬称を用いることによって、目に見える形で一定の敬意を示しました。このように敬意を目に見える形で示すことは、ほとんど何の負担にもならない一方で、大きな効果をもたらし得ることに注目できます。特に、未信者の夫を持つ信者の妻についてはそうです。ここには、身体的な虐待も搾取もなく、夫の側からの要求もありません。むしろ、この敬意の表現は、夫が権威を持つ者であることを認めるものでありながら、それによって妻自身の価値を少しも低めるものではありません——強いて言えば、誤った高ぶりが低くされることはあるかもしれませんが(そもそも高ぶりは、私たち皆が避けるべきものです)。

脅しに対する恐れからではなく：この但し書きも、理解するうえで非常に重要です。神を敬うクリスチャンの妻は、横暴な夫の不当な要求に屈服するようと言われているの**ではありません**。実際、この制限によって、妻は神に反する要求には従ってはならないことが明確に示されています。特に、正しくないことを行うよう求められたり、主が求めておられる神にかなった事柄(祈りや聖書の学びなど)をやめるよう求められたりした場合には、従うべき**ではありません**。さらに、夫のために行うすべての良いこと——夫が持つ権威ある立場に伴う、聖書にかなった適切な敬意を示すことも含めて——は、正しい動機からなされなければなりません。すなわち、イエス・キリストに栄光を帰し、私たちが共に抱いている信仰を、あらゆる正しい理由によって、できるかぎり魅力あるものとして示そうとする動機からです。

キリスト教は、妻が夫を敬わないことの口実を与えるような、放縦を認める運動ではありません——それは、私たちのだれに対しても、正当な権威を軽んじたり、それに従わなかったりする口実を与えるものではないのと同じです(ペテロの手紙 #34 参照)。しかしその一方で、私たちの信仰は、妻の権利や霊的な幸福を何ら顧みることなく、夫が思いのままに扱えるよう妻を夫に引き渡すものでもありません——それは、雇用主や政府の権威によって、認められた正当かつ合法的な範囲を超えて不当な扱いを受けることを、私たちのだれにも強いるものではないのと同じです。これに加えて、クリスチャンの夫には妻を愛と思いやりをもって扱う責任があること、また、自分より強い権力を持つ者のなすがままになりかねない人々すべてを神が見守り、守ってくださることを考

えるなら、聖書に反対する人々がここに見いだそうとするような、残酷で家父長制的な姿とはまったく異なるものが見えてきます。むしろここにあるのは、幸福で調和のとれた、うまくいく結婚のための最善の処方なのです。そこでは夫も妻も、互いの愛と敬意の中で相手に対するそれぞれの責任を果たし、相手の物質的な幸福以上に、その霊的な幸福を最優先するのです。

結婚生活におけるクリスチャンの夫の責任(7 節)：

(7) 同じように、夫たちよ、[聖書の]知識に従って妻と共に生活しなさい(すなわち、妻を正しく扱うことについて、聖書が言葉と模範によって教えていることに従って)。[女性として]より弱い者である妻に対して、[ふさわしく]接しなさい。[夫であるあなたがたは]、[永遠の]命の恵みを共に受け継ぐ者として、妻に[ふさわしい]敬意を払わなければならない。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためである(すなわち、この点での不適切な行いによって祈りが損なわれないためである)。(第一ペテロ 3 章 7 節)

まず第一に、ここでは妻に対する 6 節とは対照的に、夫に対してはわずか 1 節しかありませんが、結婚生活に対する責任の重荷は、この一節によって全面的に夫に負わされています。すでに見てきたように、妻には夫の導きに従うことが求められており(そして聖書では、その必要性和その従い方を説明するために相当の紙幅が割かれています)、一方、夫には、妻にとって良い夫となるために何が必要なのかを知ること(したがって、それを学んでいること)と、実際に妻を正しく顧みることによって、その知識を実行に移すことの両方が命じられています。そして、もしそこに失敗があるなら(祈りが妨げられることは、その失敗を測る一つの尺度です)、ここから分かるように、その失敗に責任を負うのは妻ではなく夫なのです。

この箇所から、クリスチャン男性は、自分自身が霊的に成熟する前に結婚を考えるべきではないことが分かります。結婚生活をあらゆる点で聖書にかなって正しく導きながら、妻にふさわしい敬意を払うために、結婚生活においてどのように振る舞うべきかを「知っている」責任を夫は問われることになります。ですから、結婚、家庭、そして一般にクリスチャンとしてこの世をどのように歩むべきかについて聖書が述べているすべてのことに精通していることは、結婚を成功させるための絶対的な前提条件です。さらに、これらすべてについて何をするのが正しいかを単に「知っている」だけでなく、この重大な務めを実際に果たすための内面的な霊的力を備えていることも不可欠です。そして最後に、何をすべきかを知っていることと、なすべきことを行えるだけの霊的力を備えていることは、実際に正しいことを神にかなった仕方ですら最後まで実行するための

準備にすぎません。結婚生活が一時的にせよ恒久的にせよ破綻した場合、その責任を聖書は明確に夫に負わせています。

より弱い器：これは KJV 訳の表現です。「器」という言葉は、[第一テサロニケ 4 章 4 節](#)でパウロによって男性の身体についても用いられています。したがって、ここで男女を区別しているのは、もっぱら「より弱い」という言葉です。平均的な女性と平均的な男性を比較するなら、女性が男性より精神的あるいは知的に劣っているのではないことは確かです。平均的な男性が平均的な女性より体格が大きく、身体的に強いことは確かです（したがって、私たちの国で男子スポーツと女子スポーツを適切に区別していることには正当な理由があります）。しかし、この身体的な違いも、この節でペテロが第一に言及していることではありません。一般に、女性は男性より感情的であるとよく言われます。しかし男性にも感情はありますし、人生経験を十分に積んだ人なら、女性が並外れた立ち直る力を持っていることを知っているはずで、すなわち、男性と女性では感情を受け止め、表現する仕方に違いがあるとしても、それ自体は弱さではなく、聖書がここで言っていることでもありません。

(1) さて、へびは主なる神が造られた野のすべての獣のうちで最も狡猾であった。へびは女に言った。「神は本当に、『園のどの木からも食べてはならない』と言われたのか」。(2) 女はへびに言った。「私たちは園の木の実を食べることができます」。(3) しかし、園の中央にある木の实については、神は『それを食べてはならない。それに触れてもならない。あなたがたが死ぬことのないためである』と言われました」。(4) すると、へびは女に言った。「あなたがたは決して死ぬことはない」。(5) それを食べる日に、あなたがたの目が開かれ、神のようになって善悪を知るようになることを、神は知っているのだ」。(6) 女がその木を見ると、それは食べるのに良く、目に美しく、また賢くなるために好ましい木であったので、その実を取って食べた。また、一緒にいた夫にも与えたので、彼も食べた。
([創世記 3 章 1-6 節](#) / NKJV 訳)

この非常に重要な箇所については、以前にも取り上げました。² ここでは、エバがアダムの完全な伴侶となるために造られた、と述べるだけで十分でしょう。彼女は**アダム**に**応じる**ように、すなわち身体的にも感情的にも、あらゆる面で彼に必要な「助け」となるように造られました。エバが問題に陥ったのは、別の者、すなわち彼女に対して責任を負っておらず、彼女の最善を心にかけてもおらず、ただそうであるかのように装って

² 「[Bible Basics 3A: Biblical Anthropology](#) (聖書の基礎 3A: 聖書的人間論) 第 IV 部 1 [「誘惑」](#)」 <英文>を参照下さい。

いた者の言葉を聞き、その者に応じ始めた時でした。エバはこの欺きを見抜くことができず、それが彼女のつまずきとなりました。しかし、彼女に罪があったとはいえ、アダムと同じ意味で責任があったわけではありません。アダムは自分が何をしているのかを分かっているながら、園の中で神を選ぶのではなく、園の外で女と共にいることを選びました。この違いは決定的なものでした。

主なる神は女に言われた。「あなたは何ということをしたのか」。女は言った。「へびが私を**欺いた**ので、私は食べました」。(創世記 3 章 13 節 /NKJV 訳)

しかし、へびがその悪巧みによってエバを**欺いた**ように、あなたがたの思いが、キリストに対する純真さから離れて墮落させられはしないかと、私は恐れている。(第二コリント 11 章 3 節 /NKJV 訳)

(13) アダムがまず造られ、それからエバが造られたからである。(14) また、アダムは欺かれなかったが、女は**欺かれて**、違反に陥った。(第一テモテ 2 章 13-14 節 /NKJV 訳)

これらすべての箇所が非常にはっきり示しているように、欺かれる可能性があるということが決定的な要素です。女性も罪を犯します。男性も罪を犯します。しかし女性は、たとえ非常に賢く、才能があり、立ち直る力があり、有能な女性であっても、男性より欺きに対して弱いのです。これは、神が女性をどのように造られたか、すなわち、応答する者として造られたことと関係しています。そして、完全な環境の中で完全な夫を持っていた完全な女性でさえ、悪しき者に欺かれ得たのであれば、悪魔の支配するこの世で罪の性質を持つ女性たちは、なおさらです。主が結婚において夫を権威ある立場に置かれたのは、このためです——夫のほうが妻より価値があるからではありません。決してそうではありません。そうではなく、ほかのすべての条件が同じであるなら(すなわち、夫と妻の霊的成熟度がまったく同じであると仮定するなら)、結婚生活で必要となる無数の決断を下す際に、夫のほうが欺かれる可能性が低いからです。賢い夫は、自分にはおそらく欠けている洞察力、知性、物事を見る視点を妻が持っていることを理解するでしょう。重要な決断を検討する際には、いつでも妻の意見を十分に聞くでしょう。しかし、すべてのクリスチャンの夫は、重要な決断によって生じる結果についての責任は、自分に、そして自分だけにあることを決して忘れてはなりません。そのためにこそ、夫には権威が与えられているのです。

ふさわしい敬意を十分に払うこと：このふさわしい敬意を払うことは、クリスチャンの夫が妻に対して果たさなければならない命令です。その際、妻も自分と等しく「[永遠の]

命の恵みを共に受け継ぐ者」であることを心に留めておかなければなりません。言い換えれば、私たち信者は**皆**、同じチームの一員なのです。私たちはそれぞれ、この人生において異なる役割を持っており(結婚においても、男女に基づいて異なる役割があります)、また、それぞれ異なる霊的賜物と異なる奉仕を持っています。しかし、私たちは皆等しくキリストのからだの一部であり、イエス・キリストにとって、**ある一つの肢体**がほかの肢体より価値や重要性において勝っているということはありません。³ キリストのからだにおいて私たちの役割が異なっているからといって、どのクリスチャンの価値も低くなるわけではありません。それは、肉体が正しく機能するためには、目と同じように足も必要であるのと同じです([第一コリント 12 章 14-27 節](#))。そして、結婚において私たちの役割が異なっているからといって、男性であれ女性であれ、夫であれ妻であれ、主の目におけるその人の価値が低くなることもありません。なぜなら、この一時的な世における私たちの人生を決定づけるものは結婚ではなく、何よりも重要なのは、私たち一人一人とイエス・キリストとの関係だからです。

ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。([ガラテヤ 3 章 28 節](#) /NKJV 訳)

したがって、ほかのあらゆる権威関係についての聖書の命令と同じように、結婚についての聖書の教えの目的も、一方の集団を不利な立場に置いて、もう一方の集団に力や権威を与えることではありません——実際、教会において最も高い誉れを得ようとする者は、すべての人に仕える者とならなければなりません(たとえば、[マタイ 20 章 26 節](#), [23 章 11 節](#))。むしろ、結婚において夫を権威ある立場に置く目的は、夫と妻の双方に対する神のご計画を前進させることにあります。そして、この目的を達成するために、夫には非常に厳しい行動基準が課せられ、結婚がうまくいくことについて責任を負わされているのです。

夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身を[死に]渡されたように、あなたがたも妻を愛しなさい。([エペソ 5 章 25 節](#))

この節は、クリスチャンの夫が妻に対して負っている責任を、力強く要約しています。夫が妻を、キリストがご自身の花嫁である教会、すなわち私たちを愛してくださったように愛すること以上に高い基準はありません。ですから、結婚を考えているクリスチャ

³ 「[Bible Basics 6B: Ecclesiology \(聖書の基礎 6B : 教会論\) 第 I 部 A.3 「からだとかしら」](#)」 <英文>を参照ください。

ン男性は、結婚を決意する前に、この自己犠牲を求める基準をしっかりと心に刻んでおくべきです。なぜなら、最終的には、私たちは皆、自分の行いについてイエス・キリストに対して責任を負うからです。イエス・キリストは私たちをそれほどまでに愛してくださったので、私たちのためにこの世に来られ、私たちのために死んでくださいました。それと同じように、妻のためにすべてを犠牲にする覚悟こそ、主が夫たちに求めておられる基準なのです。

II. 第二段落(8-17 節)

(8) 最後に、あなたがたは皆、心をつにし、互いに思いやりを持ち、兄弟たちを愛し、心優しく、謙遜でありなさい。(9) 悪に対して悪を返したり、そしりに対してそしりを返したりせず、かえって[他の人々を]祝福しなさい。あなたがたが召されたのは、このため、すなわち、あなたがた自身も[やがて]祝福を受け継ぐためだからである。(10) [こう書かれている(詩篇 34 章 12-16 節)]「[自分の]命を愛し、これからの日々に良いものを見たいと願う者は、その舌を[悪いことを語る]から、その唇を欺きを語ることから遠ざけよ。(11) [そのような者は]悪を行うことから離れ、代わりに善を行え。平和を求め、それを追い求めよ。(12) 主の目は義人たちに[彼らの益のために]向けられ、その耳は彼らの祈りに開かれている。しかし、主の御顔は悪を行う者たちに向けられている」。(13) そして、もしあなたがたが[神の目に]良いことすべてを[本当に]熱心に求め、[その願いに従って生きて]いるなら、だれがあなたがたに害を加えようとするだろうか。(14) しかし、たとえ正しいことを行っただけのために苦しむことになっても、あなたがたは幸いである。「彼らが恐れるものを恐れてはならない。おびえてはならない」([イザヤ 8 章 12 節](#))。(15) むしろ、心の中で何よりもキリストを主としてあがめなさい。あなたがたのうちに希望の理由を尋ねるすべての人に答えられるよう、いつでも備えていなさい。(16) しかし、それを謙遜と敬意をもって行い、[その際にも]良い良心を保ちなさい。それは、キリスト・イエスにあるあなたがたの正しい行いのゆえに[あなたがたを]脅す者たちが、あなたがたを悪を行う者としてそしっていたことを恥じるようになるためである。(17) たとえ[不信者たちの手によって]苦しむことが神の御心であったとしても、悪を行って苦しむより、善を行って苦しむほうがよいのである。([第一ペテロ 3 章 8-17 節](#))

権威関係全般について([第一ペテロ 2 章 13-17 節](#))、また奴隷制／雇用関係につ

いて([第一ペテロ 2 章 18-25 節](#))、そして特に結婚について([第一ペテロ 3 章 1-7 節](#))の話を終えたペテロは、ここで、圧迫、不当な扱い、迫害のもとでクリスチャンがどのように正しく振る舞うべきかという議論([第一ペテロ 2 章 11-12 節](#)で始められたもの)に戻ります。上で用いられている言葉や命令の多くは意味が似ており、さまざまな点で互いに重なり合っています。しかし、ここで述べられていることが多少繰り返しのように思えるとしても、繰り返すことは、あらゆる優れた教えの核心にあるものです。良い教師ならだれでも、生徒たちがついに理解できるようになるまで、さまざまな道筋や方法を用いて繰り返し教えようとするものだからです。そして、聖霊以上に優れた教師はいません。

心を一つにすること：これは、新約聖書全体を通して見られる、よく知られた重要な勧めです(たとえば、[ヨハネ 17 章 11 節](#), [17 章 20-23 節](#); [ローマ 12 章 16 節](#), [15 章 5-6 節](#); [第一コリント 1 章 10-17 節](#); [第二コリント 13 章 11 節](#); [エペソ 4 章 3 節](#); [ピリピ 2 章 2 節](#), [4 章 2 節](#))。しかし、それでもしばしば誤解されています。⁴ もちろん、ここで言われているのはクリスチャンの一致です。しかし、真のクリスチャンの一致は、外面的に一致を示すことや、エキュメニズムの中に見いだされるものではありません。真のクリスチャンの一致——キリストが私たちに望んでおられる一致——は、全面的に真理に基づいています。信者たちが神の御言葉の真理に等しくしっかりと立ち、同じ真理、唯一の真理を理解し、受け入れ、信じ、適用している時にのみ、ペテロがここで願い求めるように導かれている「一つの心」を生み出すに足る一致があり得るのです。私たち一人一人が、また全体として直面するどのような状況においても、皆が真理を正しく理解し、適用することによって物事を同じように見る時にのみ、真の**聖書的**な一致が実現するのです。

反対に、現代のエキュメニカル運動が唱える「一致」は、真理を犠牲にして成り立つものです。真理には人を一致させる働きがあります——真理を受け入れるすべての人を一つに結び合わせるからです。同時に、真理には人を分ける働きもあります——真理を受け入れることを拒む人々を遠ざけるからです。クリスチャンの一致に関して、信者は本質的でない事柄を取り除くよう求められています。しかし同時に、真理を受け入れることへの拒否が不一致の根本原因となっている場合には、その真理を拒む者を交わりから除くようにも命じられています([第一コリント 5 章 11 節](#); [第二テサロニケ 3 章 6 節](#), [3 章 14-15 節](#); [第二ヨハネ 1 章 9-11 節](#); [第一テモテ 4 章 1 節](#); [第二テモテ 3 章 1-5 節](#)参照)。真に人を「一つにする」のは、「神の御子を信じ、完全に知ること」([エペ](#)

⁴ [「Bible Basics 6B: Ecclesiology\(聖書の基礎 6B:教会論\)第 II 部 C.3.f「クリスチャンの一致」＜英文＞を参照ください。](#)

[ソ4章13節](#))だけです——すなわち、イエス・キリストを、その真のご人格、神であり人である方として信じ、また私たちの罪のために十字架上で死なれた、私たちのためのその御業を信じる救いの信仰です。私たちの信仰のこの根本的な教えについて妥協することは、背教に陥る危険を冒すことなのです。

(11) キリストご自身が、ある者を使徒、ある者を預言者、ある者を伝道者、ある者を牧者また教師として任命された。(12) それは、キリストの聖なる民すべてを、それぞれの奉仕の働きのために整え、それによってキリストのからだ全体が建て上げられるためである。(13) そしてついには、私たちすべてが、神の御子を信じ、完全に知るといふ、私たちを一つにする[目標]に到達し、一人一人が完全な人、すなわち、キリストの満ち満ちた姿という成熟の基準に達するためである。(14) それは、私たちがもはや未熟な者ではなく、人々の策略から生じる、いわゆる教えのあらゆる風によって進路を外され、激しく押し流されることがないためである。彼らは、自分たちの欺きを巧みに働かせるためなら、何でもしようとする。(15) むしろ、愛のうちに**真理をしっかりと受け入れること**によって、あらゆる点で、教会のかしらであるキリストを模範として成長していくためである。(16) このようにして、教会のからだ全体は、キリストが一つ一つの部分に力強く備えてくださる結び目によって、キリストによって組み合わせられ、結び合わされ、愛のうちに自らを建て上げるために、それ自身の成長を遂げるのである。(エペソ [4章11-16節](#))

思いやりを持つこと：ここで使われているギリシヤ語は、「共に苦しむ」という意味の複合語です。したがって、さまざまな翻訳でここを訳すためによく使われる、ラテン語に由来する「コンパッションネート compassionate (同情する、思いやりのある)」という言葉とまさに同じ意味です。明らかに、あなたが指を切ったなら、私はあなたを気の毒に「思う」ことはできますが、その傷ついた指の痛みを十分に知っているのはあなただけです。しかし、兄弟姉妹の痛みや苦しみを無視したり(他人の痛みを見て、この世の人々がしばしばするように)、心からの思いやりもなく、助けるための積極的な行動も伴わない「同情」を見せかけだけで示したりするのではなく(この世でしばしば見られる「善人アピール」のように)、ここで信者に勧められているのは、兄弟姉妹が直面している痛みを本当に心にかけ、少なくとも、神にかなったクリスチャンとしての励ましとともに、適切な助けをできるかぎり差し伸べることです。あなたが指を切ったなら、私は絆創膏を差し出すことができるかもしれませんが。あなたが愛する人を亡くしたなら、私はどうすることもできず、その悲しみを「元通りにする」ことはできませんが、少なくとも、喜んであなたの話に耳を傾け、御霊があなたを励ますために私に与えてくださる慰めの言葉を語ることはできます。

喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。(ローマ 12 章 15 節 /NKJV 訳)

兄弟たちを愛すること：この段落に挙げられているほかの事柄のほとんど、あるいはすべては、信者だけでなく不信者にも当てはまるでしょう。つまり、私たちはすべての人に対して、思いやりを持ち、心優しく、謙遜であるべきです。しかし、ここで「兄弟たちを愛する」と訳されている言葉(フィラデスフォス philadelphos; 参照:『兄弟を愛する』の意。『兄弟愛の町』とされる Philadelphia[フィラデルフィア])は、特にイエス・キリストにある仲間の信者に対する私たちの接し方に当てはまります。フィリア philia と アガペー agape に基づくギリシヤ語およびその語群は、大体において同義であることは確かですが、前者はより個人的な意味で用いられることが多く、後者は(ほかに適切な言葉がないのでこう表現しますが)より非個人的な意味で用いられることが多いのです。つまり、私たちはすべての人に愛をもって寛容に接するべきですが(agape)、信者については、可能な場合には、より個人的な仕方であらうべきなのです。私たちはキリストにある兄弟姉妹を特に大切にします。なぜなら、私たちは皆、同じからだ、同じ教会に属しているからです。

実際的に言えば、これは健全な判断力を働かせなくてもよいという意味ではありません(道を外れた信者は避けるべきです: [第一コリント 5 章 11 節](#))。また、相手が信者であるというだけで、その人と個人的に付き合うことを求められているという意味でもありません。しかし、不信者の場合には、私たちが第一に心にかけるべきなのはその人の救いです(不信者にどれほど助けや思いやりや慈善を施しても、それがその人の救いにつながらないのであれば、特別な意味を持たないからです)。それに対して、キリストにある仲間の信者については、この人生において、霊的成長、前進、そして実を結ぶことにおけるその人の霊的可能性を最大限に発揮してほしいと、私たちは熱心に願います。それを実現するための主な方法は、私たちに与えられている霊的賜物とそれぞれの奉仕を通して、彼らに仕えることです。また私たちすべてには、機会が与えられた時には、キリストにある兄弟姉妹の物質的な必要にも心を配る責任があります([第一テモテ 6 章 18 節](#); [ヘブル 13 章 16 節](#); [ヤコブ 2 章 15-16 節](#)参照)。言い換えれば、不信者に対しては、危害を加えず、つまずきを与えないように寛容に接しつつ(そして、もし彼らが受け入れる姿勢を示すなら、キリストへ導くことを熱心に願いつつ)、キリストにある兄弟姉妹に対しては、その幸福と益を、物質的な面において、そしてそれ以上に霊的な面において、積極的に促進しようとするのです。このことは、私たち自身が霊的に成長し、前進するための動機ともなります。なぜなら、そのようにして初めて、私たちは彼らに対して、なすべきほど効果的に奉仕することができるからです。

心優しくあること：この形容詞は、KJV 訳で「bowels (ボウエルズ:はらわた)」と訳されているギリシヤ語 splagchnon (スプラクノン)と、「良く」または「良い」を意味する副詞 eu (エウ。「euphonic [ユーフォニック]」参照)から成っています。splagchna (スプラクナ)は実際には胴体内部の諸器官全体を指し、そこからこの言葉は、人間の身体に生じるさまざまな感情を表すようになりました。現代では、思考や感情さえも「頭」にあると考えられていますが、古代には、怒り、愛、情熱、嫉妬、恐れなどは、身体のさまざまな器官に宿ると考えられていました。私たちは今でも「心」という言葉にこの考え方を残しており、同じような意味で使っています。もっとも、実際の心臓という器官そのものが、思考や感情的反応を生み出す器官だと考える必要は、もはや感じていません。

聖書のこの文脈で「心が善良である」、あるいは「心優しい」ということは、自分の感情が真理に対して良い方向に応答することを意味します。それは、自分の決断や行動に対して、心からの正しい動機を持っているということです。霊的に成熟した信者は、心から善いこと、正しいことを行おうとします。特に他の人々の幸福についてそうであり、彼らの救いと霊的成長、そしてそれらに役立つほかのすべての良いことを願います。霊的に成熟した信者も完全ではありません。しかし、感情に支配されて、それに反応するままに(役に立たない仕方で)行動するのではなく、理想的には、自分の内にある真理に感情を応答させます。それによって、どのような状況でも善いこと、正しいことを行うよう動機づけられ、否定的なもの、利己心、怒り、苦々しい思い、他人の不幸を喜ぶ気持ちなどをすべて捨て去り、代わりに、すべての人に対して愛と忍耐と思いやりをもって行動するのです。

(1) それゆえ、キリストにあって一つとされていることから何らかの励ましが
あり、その愛から何らかの慰めがあり、御霊にあずかる交わりがあり、何らかの
優しい心(スプラクナ splagchna)と思いやりがあるなら、(2) 同じ思いとなり、同
じ愛を持ち、心を一つにし、思いを一つにして、私の喜びを満たしなさい。(ピリピ
2章 1-2 節 /NIV 訳)

神はあなたがたを選び、愛される聖なる民とされたのだから、**心からの**(スプラクナ splagchna)あわれみ、親切、謙遜、柔和、忍耐を身に着けなさい。(コロサイ 3章 12 節 /NLT 訳)

謙遜：真の聖書的な謙遜は、わざと自分を卑下したり、自分を目立たなくしたりするような態度や振る舞いとは**何の関係もありません**。聖書的な意味で謙遜であることは、自分自身や、自分が人にどう見えるかに高慢なまでに意識を向けること**ではありません**。真の聖書的な謙遜は、主観的に自分自身に目を向けるのではなく、完全に客観的であり、自分自身や他人からどう見られているかではなく、神とほかのクリスチャンの益に

目を向けることなのです。

さて、モーセは非常に謙遜な人で、地上のだれよりも謙遜であった。(民数記 12 章 3 節 /NIV 訳)

この箇所は、聖書的な謙遜の本当の意味をまだ理解していない人にとっては驚くべきものです。私たちの主イエス・キリストを除けば、モーセほど謙遜な人はかつていませんでした。しかし、モーセも私たちの主も、自信がなかったとか、自分には価値がないかのように振る舞ったとか非難されるような方ではありませんでした。高慢とは、実際にはできないことについて自信があると思い込み、そう主張し、実際には持っていない価値が自分にあるかのように見せることです。真の謙遜が自慢をしないことは確かですが、同時に、真実なことを否定したり、単に他人からどう見られるかを気にして、真実であることを真実でないかのように振る舞ったりすることはありません(ヨハネ 8 章 55 節参照)。モーセは(そしてもちろん、私たちの主も)、自分に委ねられた権威を、自信をもって、しかも利己心なく、自分に委ねられた人々の益のために用いることを少しもためらいませんでした。その権威をひけらかすことも、誤用したり乱用したりすることはありませんでしたが、実際にその権威を持っていたので、自信をもって行使したのです。

私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言う。自分を実際以上に高く評価してはならない。むしろ、神がそれぞれに分け与えられた信仰に応じて、慎み深く自分を評価しなさい。(ローマ 12 章 3 節 /NIV 訳)

謙遜とは、物事をありのままに見ることです。高慢は、その真実をゆがめます。イエス・キリストと近く歩んでいる信者にとって、その目的は常にはっきりしています。私たちは、主が私たちに与えてくださった戦いを戦うために、この世にいるのです。その真の目的を心に留め続けることこそ、聖書的な客観性、そして聖書的な謙遜の本質です。他人が私たちをどう思うかは重要ではありません。私たちは、自分が何者であり、どのような者であるかについて偽りの姿を作り上げ、他人の目に自分を高く見せようとしているわけではありません。また、この世の人々の目に自分を低く見せようとしているのでもありません。それも同じように真実をゆがめるからです。むしろ、私たちはそもそも自分自身のことをそれほど気にかけてはいません(自分自身に心に向けることこそ主観的だからです)。そうではなく、可能なかぎり、イエス・キリストと、主が望んでおられることに全面的に目を向けるのです。したがって、真の聖書的な謙遜の鍵は、自分自身や、他人が自分をどう見るかに心を奪われることなく、イエス・キリストに心に向けることなのです。

(24) 信仰によって、モーセは成人した時、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、(25) 罪のはかない楽しみを味わうよりも、神の民と共に苦しめられることを選んだ。(26) それは、キリストのために受けるそしりを、エジプトの[すべての]宝よりも大きな富と考えたからである。彼は報いを見つめていたのである。(27) 信仰によって、彼は王の怒りを恐れずにエジプトを去った。彼は、目に見えない方を見ていることによって(すなわち、目に見えない主イエス・キリストに心の目を向け続けることによって)、強くなったのである。([ヘブル 11 章 24-27 節](#))

悪に対して悪を返さず、そしりに対してそしりを返さないこと： 私たちが何を考えるべきかについて詳しい指針を与えた後、ペテロは今度は道の反対側の「ガードレール」を示し、そうすることによって、先に挙げた良い態度が本当には何を意味しているのかを、より鮮明に浮かび上がらせています。ただし、上に挙げられた良い性質、すなわち、一致、思いやり、兄弟愛、心の優しさ、謙遜は、すべて神にかなった言葉と行いを生み出す態度であることに注意すべきです。その一方で、否定的な面については、ペテロは、言葉や行動による仕返しを生み出す罪深い思考パターンそのものを詳しく論じてはいません。むしろ、先ほど勧めた神にかなった思考パターンを身につけないことによって生じる悪い結果を示しています。一致、思いやり、兄弟愛、心の優しさ、謙遜、そして御霊によるこれらと同じような聖なる思い([ガラテヤ 5 章 13-26 節](#))に心を向け続けることを怠れば、突然圧力がかかった時に、軽率な言葉や、よく考えない行動に走りやすくなることは避けられません。

他人からされたことと同じ仕方で、行動であれ言葉であれ、仕返しをすることは、罪の性質からすればごく自然なことです。しかし、それこそまさに、信者が避けるよう命じられている、あまりにも人間的な行動なのです。

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのようにしなさい。これが律法と預言者だからである。」([マタイ 7 章 12 節](#) /NKJV 訳)

「また、人々にしてほしいと望むとおりに、あなたがたも同じように人々にしなさい。」([ルカ 6 章 31 節](#) /NKJV 訳)

一般に「黄金律」と呼ばれているこの原則は、しばしば考えられていることよりも、現在取り上げている [第一ペテロ 3 章 9 節](#) が述べていることのほうに、その本質があります。他人との関係においては、他人の手から何らかの利益を受けることよりも、そっとしておいてもらい、悪意をもって干渉されたり害を加えられたりしないことのほうが、必要である場合が多いのです。もちろん、他人から何か良いことをしてもらうことが、神の目に本当に「良い」場合もあります(たとえば、本当に困っている信者をほかの信者が助

ける場合です。ただし、この場合でさえ、私たちの賜物に従って与える霊的な助けこそ、このような命令を果たすうえで最も重要なものです。[ガラテヤ 6 章 8-10 節](#)参照)。しかし、はるかに一般的なものは前者、あるいはむしろ、それが欠けている状況です。すなわち、他人から嫌がらせを受けたり害を加えられたりしたくないという願い、そして実際にそのようなことが起こった時には、当然腹を立てることがあるとしても、仕返しをしないという神にかなった選択をすることです。

怒りは危険な感情であり、一時的な狂気のようなものです(英語でもギリシヤ語でも、「mad」という概念が怒りと狂気の両方を表すのには理由があります)。自分の罪を日ごろから告白することを習慣にしているクリスチャンなら、自分の怒りについて「日の入るまで」持ち越さないようにするという聖書の教えに、容易に従うことができるはずです([詩篇 4 章 4 節](#); [エペソ 4 章 26 節](#))。それ以上に危険なのは、そのような侮辱や不快な扱いに対して、よく考えずに即座に反応してしまうことです。イエス・キリストと近く歩んでいる人は、良心のためだけでなく、実際的な理由からも、仕返しとなる行動や中傷は、その気配さえも避けたいと思うでしょう。言葉であれ行動であれ、ごく小さな侮辱を受けた場合でさえ、私たちは皆、この点では、性急でよく考えない反応をしてしまいやすいからです。そして一見意外かもしれませんが、その侮辱が取るに足りないものであればあるほど、なおさらそうなり得ます。小さな仕返しによって生じ得る害は、すぐにはそれほど明らかに見えないからです。

争いの始まりは、堤防を破るようなものである。それゆえ、争いが起こる前に、その問題から手を引け。[箴言 17 章 14 節](#) /NIV 訳)

結局のところ、神の御言葉に従うことが常により良い道です。大小を問わず、仕返しによって得られるどのような満足も、この非常に明確な教えに従わなかったために受ける神の懲らしめや、そこから自然に生じる悪い結果を埋め合わせることは決してできません。しかし、その代わりに愛と寛容の原則に従う人にとっては、物事はいつもより良い方向に進むのです。

(17) だれに対しても、悪に悪を返してはならない。すべての人の目に正しいことを行うよう心がけなさい。(18) できることなら、あなたがたに関するかぎり、すべての人と平和に暮らしなさい。(19) 愛する者たちよ、自分で復讐してはならない。むしろ神の御怒りに任せなさい。こう書かれているからである。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いる」([申命記 32 章 35 節](#))と主は言われる。(20) むしろ、「あなたの敵が飢えているなら、食べさせなさい。渴いているなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むこと

になる」([箴言 25 章 21-22 節](#))。(21) 悪に負けてはならない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい。([ローマ 12 章 17-21 節](#) /NIV 訳)

だれも悪に悪を返すことのないように気をつけなさい。むしろ、互いに対して、またすべての人に対して、常に良いことを行うよう努めなさい。([第一テサロニケ 5 章 15 節](#) /NIV 訳)

代わりに他の人々を祝福すること： そしりに対してそしりを、悪に対して悪を返すこととは反対の態度が、ここでは「他の人々を祝福すること」と言われています。ギリシヤ語の eulogeō(エウロゲオー)は、新約聖書で「祝福する」を意味するヘブル語の動詞 bārak(バーラク)を訳すために用いられる二つの語の一つであり、語源的には確かに、言葉による祝福と関係があります(接頭辞 eu-(エウ)は「良い」を意味し、log-(ログ)は言葉や話すことに関係しています)。しかし、どの言語でも言葉の意味は、実際にどのように使われているかによって決まるものであり、語源は手がかりにはなっても、時には誤解を招くこともあります。

「あなたがたは預言者たちの子孫であり、また神が私たちの父祖たちと結ばれた契約の子孫である。神はアブラハムに、『あなたの子孫によって、地上のすべての民族は祝福される』([創世記 22 章 18 節](#), [26 章 4 節](#), [28 章 14 節](#))と言われた。」([使徒行伝 3 章 25 節](#)/NKJV 訳; 参照:[ガラテヤ 3 章 8-9 節](#))

ここで言われている「祝福」は、第一に神から来るものであり、第二に、単なる言葉による宣言ではなく、明らかに実際にもたらされるものです。さらに旧約聖書では、預言者によって預言としての効力をもって語られた言葉による祝福も、上の例のように、実際の結果をもたらしました(たとえば、イサクがヤコブを祝福したことや、ヤコブが自分の息子たちを祝福したことも思い起こされます)。これもまた、私たちが「祝福を受け継ぐ[ために]召された」と言われている、その「祝福」と同じ種類のものです。主にある私たちの現在と将来の祝福は、すばらしく、実に多くのものがあります([エペソ 1 章 3 節](#))。私たちには聖霊が与えられています。私たちは新しく生まれ、上から生まれました。私たちはイエス・キリストにあって一つです。天には私たちを待っている相続財産があり、永遠の命と復活があり、新しいエルサレムには私たちのために備えられている場所があります。⁵ では、「他の人々を祝福する」とは、どういう意味なのでしょう。

⁵ 今も、そして永遠の将来においても、私たちに与えられる祝福には限りがありません。そのような祝福の主な種類を簡潔にまとめたものについては、[『Bible Basics 4B: Soteriology\(聖書の基本 4B:救済論\)』の第 III 部「救われるとはどういうことか」](#)を参照してください。

一つ、はっきりと言えることは、ペテロは、多くの人が習慣的に言う「祝福がありますように！」とか「神の祝福がありますように！」という言葉の口にすることを意味しているのではないということです。まず、私たちには神の祝福を他の人々の上に呼び下す力はありません([ヘブル 7 章 7 節](#)参照)。私たちはだれかのために神に願い求めることができますが、自分にそのような力があると思ひ込むこと、また、自分にはその力があると思っているかのような印象を他の人に与えることは、僭越であり危険です。もちろん、このやや問題のある表現の起源は願いであり、「神があなたを祝福してくださいますように！」という意味です。少なくとも、このように完全な形で言えば、神の祝福を命じているのではなく(そのような力が私たちにはないことは言うまでもありません)、その人に神の祝福があるよう願っているだけだということが明確になるという利点があります。しかし、それでも問題は残ります。なぜなら、実際には、ただ願うだけでは何の助けにもならないからです。だれかのために祈るつもりなら、実際にそうすべきです。しかし多くの場合、この特定の言い回しをその場で口にして、祈るつもりであると宣言するよりも、黙って実際に祈るほうがよいでしょう(実際、この表現が本当の祈りを伴うことはめったにありません)。

第二に、役に立つ言葉で他の人を励ますことも「祝福」となり得ますが、それはここで言われていることの一部にすぎません。信者は、言葉にも行いにも、やられたらやり返すような人になるのではなく、周囲のすべての人にとって祝福となることが、さまざまな仕方のできるからです。明るく前向きで、決して人をそしらない人は、当然、一緒にいて心地よいものです。そして、イエス・キリストと近く歩み、御国を第一に求めている霊的に成熟した信者は、周囲のすべての人にとって「地の塩」です([マタイ 5 章 13 節](#))。上で引用したアブラハムの場合と同じように、神の御心を行っている人々との関わりがあるという理由で、神は彼らの属する組織や、その影響の及ぶ範囲にいるすべての人々を祝福されます([使徒行伝 3 章 25 節](#); [創世記 9 章 24-27 節](#), [30 章 30 節](#); [詩篇 37 章 26 節](#)後半; [箴言 11 章 11 節](#), [14 章 26 節](#); [歴代誌上 13 章 13-14 節](#); [使徒行伝 27 章 24 節](#)参照)。また信者には、物質的な面で他の人々を助けたり、励ましや助言の言葉を与えたり、慈善的な行いをしたりする機会もしばしば与えられます——それが個人から個人へとなされ、福音への扉を開くことにつながる場合には、正当なものです。そして最後に、すべての信者には霊的賜物が与えられており、それを仲間の信者の益のために、また賜物によっては、イエス・キリストの福音のために用いることができるという祝福が与えられています。これらすべては、まさに本当の意味での祝福であり、この節で避けるよう警告されている正反対の行動ではなく、すべての信者が人生において心に向けるべきものなのです。

舌を抑えること:

「こう書かれているように([詩篇 34 章 12-16 節](#))」「[自分の]命を愛し、幸いな日々を送りたいと願う者は、その舌を[悪いことを語ること]から、その唇を欺きを語ることから遠ざけよ。」([第一ペテロ 3 章 10 節](#))

9 節で述べられた、私たちは祝福を受け継ぐために召されたということは、この引用([詩篇 34 章 12-16 節](#))によって裏づけられ、さらに詳しく説明されています。これは、人生における祝福は、祝福とは反対のものをもたらす行いを避けることと密接に結びついている、という聖書がよく知られた原則を表しています。そして、その第一に挙げられるのが舌による罪です。舌による罪には多くの種類があるため、聖書には、さまざまな危険な仕方で舌を誤用することに対する警告が数多く記されています。しかし、自分の舌を制御することは決して容易ではありません。舌を制御することにおいて大きく前進してきた成熟した信者でさえ、誘惑を受けると、時として再び「思ったことを口走ってしまう」ことがあります。

(1b) 私は言った。「私は自分の道に気をつけ、舌で罪を犯さないようにしよう。悪しき者が私の前にいる間は、私の口にくつわをかけておこう。」(2) そこで私は全く黙り、良いことさえ口にしなかった。しかし、私の苦悩は増し、(3) 心は私のうちで熱くなった。思い巡らしているうちに火が燃え上がり、その時、私は舌をもって語った。([詩篇 39 篇 1-3 節](#) / NIV 訳)

(2) 私たちは皆、多くの[罪深い]過ちを犯す(字義的には「多くつまづく」、すなわち、ある程度不注意に罪を犯す)。もし、語ることに於いて[罪深い]過ちを犯さない者がいるなら、その人は[行いにおいて]完全な人であり、全身をも制御することができる。(3) 馬を従わせるために、その口にくつわをつけることを考えてみなさい。そうすれば、[私たちは]その全身を思いどおりに動かすことができる。(4) また、船のことも考えてみなさい。船は非常に大きく、強い風に吹かれて進むが、それでも非常に小さな舵によって、舵を取る者が望むところへ動かされる。(5) 同じように、舌も小さな器官でありながら、大きなことを誇る。見よ、ほんの小さな火が、どれほど大きな火事を引き起こすことか。(6) 舌もまた[そのような]火である。私たちのほかの器官の中にあって、舌は悪の体系全体をそのうちに宿し、全身を汚し、人間の生涯のあらゆる面を燃え上がらせ、それ自身もゲヘナの火によって燃やされる。(7) あらゆる種類の鳥、獣、這うもの、泳ぐものは、人間によって飼いならすことができ、実際に飼いならされてきた。(8) しかし、舌を飼いならすことのできる人はいない。それは抑えがたい悪であり、死をもたらす毒に満ちている。(9) 私たちは舌をもって主であり父である方をほめた

たえ、また同じ舌をもって、神に似せて造られた[仲間の]人間をのろう。(10) 同じ口から祝福とのろいが出て来る。兄弟たちよ、このようであってはならない。
([ヤコブ 3 章 2-10 節](#))

ペテロが引用している[詩篇 34 篇 13 節](#)の「その舌を[悪いことを語ること]から遠ざけよ」という言葉において、私たちが口にすべきでないことは何であれ、神の目には「悪い」もの、良くないもの、邪悪なものです——この引用の元となっているヘブル語では、これらの言葉の間に区別はありません。要するに、その動機によっては、人が口にするほとんどどのような言葉も罪深いものになり得ます。ですから、舌を自由にさせた結果、神にかなった慎重さを欠いた言葉を語るくらいなら、黙っているほうがよいのです([箴言 13 章 3 節](#), [17 章 28 節](#), [21 章 23 節](#); [ヤコブ 1 章 19 節](#); [詩篇 141 篇 3 節](#) 参照)。

言葉が多ければ、罪を犯さないではいられない。しかし、舌を抑える者は知恵がある。([箴言 10 章 19 節](#) /NIV 訳)

(36) 「しかし、あなたがたに言う。人は、自分が語ったすべての無益な言葉について、裁きの日に申し開きをしなければならない。(37) あなたは、自分の言葉によって義とされ、また自分の言葉によって罪に定められるのである。」([マタイ 12 章 36-37 節](#) /NIV 訳)

悪い言葉をいっさい口から出してはならない。ただ、聞く人々に益を与えるため、その必要に応じて人を建て上げるのに役立つ言葉だけを語りなさい。([エペソ 4 章 29 節](#) /NIV 訳)

また、みだらなこと、愚かな話、下品な冗談など、ふさわしくないことを口にしてはならない。むしろ、感謝をささげなさい。([エペソ 5 章 4 節](#) /NIV 訳)

しかし今は、あなたがたもまた、怒り、憤り、悪意、中傷、そして口から出る汚れた言葉など、これらすべてを捨て去りなさい。([コロサイ 3 章 8 節](#) /NIV 訳)

上に挙げた聖句が非常に広い範囲にわたっていることを考えると、人間の口から出るさまざまな言葉について少し考えてみるだけでも、言葉による罪には実に多くの種類と分類があり、この問題について聖書が述べていることすべてを適切に分類しようとするれば、それだけで一つの独立した研究になるほどであることが分かります。したがって、以下の短いリストは網羅的なものを目指しているではありません。むしろその目

的は、聖書が間違った言葉とみなしているものが、どれほど広い範囲に及ぶかをある程度示すことにあります(ここに挙げられているものの多くは、互いに重なり合っていたり、しばしばほかのものと組み合わせたりしています)。

a) うわさ話: 人を悪く言うこと、中傷すること、言葉によって他人を裁くこと、他人のことに干渉することの危険性は、聖書、とりわけ箴言を読んだことのある人なら、よく知っていることです([箴言 10 章 18 節](#), [11 章 16 節](#), [16 章 28 節](#), [17 章 4 節](#), [17 章 9 節](#), [18 章 8 節](#), [19 章 22 節](#), [25 章 23 節](#), [26 章 20 節](#), [26 章 22 節](#), [30 章 10 節](#); [マタイ 7 章 1 節](#); [ルカ 6 章 37 節](#); [エペソ 4 章 31 節](#); [第一テモテ 5 章 13 節](#); [第一ペテロ 4 章 15 節](#))。

うわさ話をする者は秘密を漏らす。それゆえ、口数の多い者を避けなさい。
([箴言 20 章 19 節](#) /NIV 訳)

b) 愚かな話: ([箴言 17 章 28 節](#); [第二テモテ 2 章 23 節](#); [テトス 3 章 9 節](#); [イザヤ 32 章 6 節](#)参照) 信者は主イエス・キリストを代表する者であり、主とその真理のための使者です([第二コリント 5 章 20 節](#))。ですから、私たちが代表している主人の栄光のために、ある程度の品位をもって振る舞うほうが、あらゆる種類のくだらない話を絶えず口にするおしゃべりな者として知られるよりも望ましいのです。特に、その愚かな話が少しでも偽りに傾く場合にはなおさらです(そして、そのような話は必然的にそうになってしまうものです)。

……みだらなこと、愚かな話、下品な冗談など、ふさわしくないことを口にすることはならない。むしろ、感謝をささげなさい。([エペソ 5 章 4 節](#) /NKJV 訳)

テモテよ、あなたに委ねられているものを守りなさい。神を敬わないむだ話や、誤って「知識」と呼ばれているものの反対論を避けなさい。([第一テモテ 6 章 20 節](#) /NIV 訳)

神を敬わないむだ話を避けなさい。それにふける者たちは、ますます神を敬わない者となっていくからである。([第二テモテ 2 章 16 節](#) /NIV 訳)

c) 言い争い: 争い、対立、議論、口論などは平和を乱し、さらに多くの思いによる罪、言葉による罪、そしてしばしば実際の行動による罪へとつながります。ですから、成熟した信者は、可能なかぎり、不必要な言葉による争いを避けるのが賢明です([詩篇 31 篇 19-20 節](#); [箴言 15 章 18 節](#), [17 章 14 節](#), [18 章 6 節](#), [18 章 19 節](#), [25 章 23 節](#), [26](#)

[章 17 節](#), [26 章 21 節](#), [30 章 33 節](#))。

争いから遠ざかることは人の誉れである。しかし、愚かな者はみな争いを起こす。[\(箴言 20 章 3 節 /ESV 訳\)](#)

あざける者を追い出せ。そうすれば争いも出て行き、口論と侮辱もやむ。[\(箴言 22 章 10 節 /ESV 訳\)](#)

薪がなければ火は消え、陰口を言う者がいなければ争いはやむ。[\(箴言 26 章 20 節 /ESV 訳\)](#)

(23) 愚かで無知な議論を避けなさい。それが争いを生むことを知っているからである。(24) 主の僕は争ってはならず、すべての人に優しく、よく教えることができ、忍耐強くなければならない。(25) 反対する者たちを謙遜をもって正しなさい。もしかすると神が彼らに悔い改めを与え、真理を知るようにしてくださるかもしれない。(26) そうすれば彼らは正気に戻り、悪魔のわなから逃れることができる。彼らは悪魔の意志を行うために、そのとりこされていたのである。[\(第二テモテ 2 章 23-26 節 /NIV 訳\)](#)

しかし、愚かな議論や系図、論争や律法についての争いを避けなさい。それらは無益で役に立たないからである。[\(テトス 3 章 9 節 /NIV 訳\)](#)

d) 不平を言うこと: [\(ピリピ 2 章 14 節; ヤコブ 5 章 9 節; 第一ペテロ 4 章 9 節; イザヤ 29 章 24 節; ルカ 5 章 30 節, 15 章 2 節, 19 章 7 節; ヨハネ 6 章 41 節, 6 章 43 節, 7 章 12 節参照\)](#)かつてデパートには「苦情受付窓口」がありました。そして、何か問題があって実際に対処する必要がある場合、その問題を責任ある人に報告することには、もちろん何の問題もありません。また、私たちのほとんどは、一日のうちに、何かのこと、あるいはだれかのことについて、自分の「気になること」を接する人々に一度も話さずに過ごすことは難しいでしょう。うわさ話についてはすでに上で取り上げましたし、信者が権威に対して持つべき正しい態度についても、このシリーズの前回で扱いました。特に政治家や有名人、あるいは私たちの生活の中で問題を起こす人々については、「良いことを言えないのなら、何も言うな」という昔からの原則を、いつでもためらうことなく守れる人は、おそらく私たちの中でも比較的少ないでしょう。しかし、信者が何としても避けなければならない種類の不平があります。それは、神を責めることです。

「見よ、主は幾万もの聖徒たちを率いて来られる。(15) すべての者を裁き、神を敬わない者たちが神を敬わずに行ったすべての不敬虔な行いと、神を敬わない罪人たちが主に逆らって語ったすべての厳しい言葉について、彼らを罪に定めるためである。」(16) 彼らはつばやく者、不平を言う者(字義的には「自分の境遇を責める者」)であり、自分の欲望に従って歩んでいる。(ユダ 1 章 14 節後半-16 節前半 /NKJV 訳)

ですから、ぶつぶつ不平を言ったり、愚痴をこぼしたり、文句を言ったり、泣き言を言ったりすることは、日常生活にはつきものかもしれません(もっとも、軍務に就いている間、もっともな不満をこのような形で吐き出すことさえ許されなかったなら、どうやってやっていけるのか想像するのも難しいでしょう)。しかし信者は、不平につながる不満の気持ちと、そのことで主を責めることとを、常に注意深く区別しなければなりません。そして、私たちの人生に起こるすべてのことを神が支配しておられる以上、不平を言い続けながら、実際には主と、主が私たちの人生を導いておられることに少しも不満を抱かないでいることは、非常に難しいのです。これは一見ただけでは明らかでないかもしれませんが、しかし、「愚痴大会」の真っ最中に少し立ち止まって自分の霊的状态を振り返るなら、「自分の境遇を責める」ことは、結局のところ、その境遇を私たちに割り当てておられる方を責めることにつながると分かるでしょう——そして、それは非常に危険なことです。

(5) しかし、彼らの大多数を神は喜ばれなかったので、彼らは荒野で倒された。(6) これらのことは、彼らが悪いものをむさぼったように、私たちも悪いものをむさぼることのないために、私たちへの戒めとなったのである。(7) また、彼らのうちのある者たちのように、偶像を拝む者となってはならない。こう書かれている。「民は座って飲み食いし、立って戯れた。」(8) また、彼らのうちのある者たちがしたように、性的な不品行を行ってはならない。そのため、一日のうちに二万三千人が倒れた。(9) また、彼らのうちのある者たちがキリストを試みて蛇によって滅ぼされたように、私たちもキリストを試みてはならない。(10) また、彼らのうちのある者たちが不平を言って、滅ぼす者によって滅ぼされたように、あなたがたも不平を言ってはならない。(11) これらのことはすべて、彼らの身に警告となる実例として起こったのであり、時代の終わりに臨んでいる私たちへの戒めとして書かれたのである。(第一コリント 10 章 5-11 節 /NKJV 訳)

出エジプトの世代は、このことで悪名高い人々でした。物事が「うまくいかなくなる」たびに、主が彼らに与えられた試練に信仰をもって応じるのではなく、その時々に関心を持ち、自分たちが気に入らないことについてモーセを責め、したがって事実上、神を責めました。

そしてここに、つぶやくような不平の何がそれほど間違っているのかが分かります(問題を責任ある人に感情的にならずに報告することとは異なります)。自分の置かれている状況についてつぶやき不平を言うことは、本質的には神に対する信仰の欠如、そして神の善とあわれみを信じていないことの表れなのです。

そこでモーセとアロンは、すべてのイスラエル人に言った。「夕方には、あなたがたをエジプトから導き出されたのが主であることを知るであろう。(7) また朝には、主の栄光を見るであろう。主が、ご自分に対するあなたがたのつぶやきを聞かれたからである。あなたがたが私たちに向かってつぶやくとは、いったい私たちは何者なのか。」([出エジプト 16 章 6-7 節](#) /NIV 訳)

e) のろうこと: ここで言う「のろう」とは、汚い言葉や冒涇的な言葉を使うことを意味しているのではありません(もちろん、それらも聖書によって非難されています。例えば、[エペソ 4 章 29 節](#), [5 章 4 節](#); [コロサイ 3 章 8 節](#))。そうではなく、神の祝福を願うこととは反対に、他の人に対してのろいを口にし、言葉によってその人に災いが及ぶことを願うことを意味しています。⁶

あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。([ローマ 12 章 14 節](#) /NIV 訳; 参照: [ルカ 6 章 28 節](#))

(9) 私たちは舌をもって主であり父である方をほめたたえ、また同じ舌をもって、神に似せて造られた人間をのろう。(10) 同じ口から、賛美とのろいが出て来る。兄弟姉妹たちよ、このようであってはならない。([ヤコブ 3 章 9-10 節](#) /NIV 訳)

f) 脅すこと: もし、これから起こる恐ろしい結果のゆえに脅すだけの理由があり、しかもその脅しを実行する能力と権威の両方を持っていた方がいるとすれば、それは私たちの主でした。しかし、人間の手によって受けた、これ以上ないほど不当な虐待のただ中で、主がどのように振る舞われたと聖書は教えているでしょうか。

(21b) キリストもまた、あなたがたのために死なれ、あなたがたがその足跡に従うようにと、模範を残された。(22) 「彼は罪を犯さず、その口には何の欺きも見いだされなかった」([イザヤ 53 章 9 節](#) 後半)。(23) そしられても、そしり返さ

⁶ 誓いを立てることや、神にかけて誓うことも、新約聖書では強く戒められています([マタイ 5 章 33-37 節](#); [ヤコブ 5 章 12 節](#))。

ず、苦しめられても脅すことをせず、正しく裁かれる方にご自身を委ねられた。
([第一ペテロ 2 章 22-23 節](#))

主はすべてのことにおいて私たちの模範です。ですから、たとえ今まさに不当な虐待を受けようとしている時であっても、私たちは脅しの言葉を口にするのを、断固として慎まなければなりません。([エペソ 6 章 5-9 節](#))

愛する者たちよ、自分で復讐してはならない。むしろ、神の怒りに任せなさい。こう書かれているからである。「復讐はわたしのすることである。わたしが報復する」と主は言われる。([ローマ 12 章 19 節](#) /KJV 訳)

g) へつらうこと：ここで言う「へつらい」とは、悪意のない褒め言葉のことではありません。へつらいの罪は、意図的に人を欺こうとする誤った動機と密接に結びついています。つまり、何らかの悪い目的や罪深い目的(例えば、人を誘惑したり、何かについて欺いたりすること)をもって人にへつらうことであり、しばしば他の陰險な行為を伴います([詩篇 12 篇 2-3 節](#); [箴言 28 章 23 節](#); [ヨブ 32 章 21-22 節](#) 参照)。

彼らの口には真実がなく、その内には滅びがあり、そののどは開いた墓であり、その舌をもってへつらう。([詩篇 5 篇 9 節](#) /NKJV 訳)

偽りを言う舌は、それによって傷つけられた者を憎み、へつらう口は滅びをもたらす。([箴言 26 章 28 節](#) /NKJV 訳)

隣人にへつらう者は、その足もとに網を張る。([箴言 29 章 5 節](#) /NIV 訳)

(17) 兄弟たちよ、あなたがたが学んだ教えに反して、分裂を引き起こし、あなたがたの前につまずきとなるものを置く者たちを警戒するよう、私は勧める。そのような者たちから離れなさい。(18) そのような者たちは、私たちの主キリストに仕えているのではなく、自分自身の欲望に仕えているからである。彼らは巧みな言葉とへつらいによって、純朴な人々の心を欺く。([ローマ 16 章 17-18 節](#) /NIV 訳)

この人々は、つぶやく者、不平を言う者であり、自分自身の悪い欲望に従って歩んでいる。彼らは自分自身について大言壮語し、自分の利益のために他の人々にへつらう。([ユダ 1 章 16 節](#) /NIV 訳)

h) 冒瀆：英語の ブラスファミーblasphemy(冒瀆)の語源となったギリシヤ語は、一般的に人を「悪く言うこと」を指す場合もあります(これも避けるべきことです。[第二ペテロ 2 章 10-12 節](#); [ユダ 1 章 9 節](#)参照)。しかし聖書では、これらの言葉はしばしば、神に対する言葉による攻撃を指すものとして用いられています([マタイ 15 章 19 節](#); [マルコ 7 章 22 節](#); [使徒行伝 26 章 11 節](#); [第一テモテ 1 章 20 節](#); [第二テモテ 3 章 2 節](#); [黙示録 13 章 1-6 節](#), [17 章 3 節](#))。言うまでもなく、これは言葉による罪の中でも最も危険なものの一つ、もしかすると最も危険なものであり、十戒の一つがこの罪を禁じるために定められているほどです([出エジプト 20 章 7 節](#); [申命記 5 章 11 節](#))。第三の戒めが明らかにしているように、冒瀆は神について悪いことを言うことだけに限られません。神に偽りのことを帰したり、神の御名によって偽りを真実であると断言したりすることも、冒瀆の重要な一部です。クリスチャンはだれであれ、どのような状況であっても、神の御名を口にする際には常に注意しなければなりません([レビ 24 章 16 節](#); [エペソ 4 章 31 節](#); [コロサイ 3 章 8 節](#))。

神を冒瀆してはならない。また、あなたの民の支配者をのろってはならない。
([出エジプト 22 章 28 節](#) /NIV 訳)

「だから、あなたがたに言う。どのような罪も、またどのようなそしりも赦される。しかし、御霊に対する冒瀆は赦されない。」([マタイ 12 章 31 節](#) /NIV 訳)

i) 自慢すること：「ほかの人にあなたをほめさせよ。自分の口ではめてはならない。見知らぬ人にほめさせよ。自分の唇ではめてはならない」という聖書の教えは、まさに知恵の極みです([箴言 27 章 2 節](#) /KJV 訳)。残念ながら、「生活における誇り」は、すべての人間の罪の性質を特徴づける本質的な要素です([第一ヨハネ 2 章 16 節](#))⁷。そのため、だれでも時には「自分のことを吹聴したい」という誘惑にかかります。もちろん、基本的な意味では、自分が成し遂げたことや自分の能力について単に述べるだけなら、必ずしも「限度を越えて」誇ることはありません([第二コリント 10 章 13 節](#))。しかし、高慢な自己賛美を聞けば、私たちは皆それと分かります。そして、この二つを分ける決め手となるのは、しばしば真実を越えて誇張しているかどうかです。後者、すなわち真実を越えた誇張は、クリスチャンとしての正しい歩みとは相容れません([詩篇 12 篇 3 節](#); [ローマ 1 章 30 節](#); [第二テモテ 3 章 2 節](#); [ヤコブ 3 章 14 節](#); [第二ペテロ 2 章 18 節](#); [ユダ 1 章 16 節](#))。

⁷ [第一ヨハネ 2 章 16 節](#)で通常「高慢」と訳されるギリシヤ語(ἀλαζονεία / alazoneia[アラゾネイア])は、自慢することと密接に関係しています(同じ語根を持つ動詞には「自慢する」という意味があります。[ローマ 1 章 30 節](#); [第二テモテ 3 章 2 節](#)参照)。

愛は忍耐強く、愛は親切である。ねたまず、自慢せず、高ぶらない。(第一コリント 13 章 4 節 /NIV 訳)

しかし、私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇るものが決してあってはならない。この十字架によって、世は私に対して十字架につけられ、私も世に対して十字架につけられたのである。(ガラテヤ 6 章 14 節 /NIV 訳)

(8) あなたがたが救われたのは、恵みにより、信仰を通してである。そして、これはあなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。(9) 行いによるのではない。それは、だれも誇ることのないためである。(エペソ 2 章 8-9 節 /NIV 訳)

ところが今、あなたがたは高慢な企てを誇っている。そのような誇りはすべて悪である。(ヤコブ 4 章 16 節 /NIV 訳)

j) 偽ること：おそらく、言葉による罪の中で最も重大であり、また最も広く見られると言ってよいものが、偽ることです。クリスチャンである私たちは、イエス・キリストの福音の真理を信じることによって救われ、同じ御国の真理を堅く守り、それを証しすることによって成長し、前進し、主に仕えます。言うまでもなく、真理はあらゆる偽りとは正反対のものです。それは、真理そのものであられる私たちの主イエス・キリスト(ヨハネ 1 章 9 節, 14 章 6 節; 黙示録 19 章 11 節)が、主と私たちに敵対する者、すなわち、あらゆる偽りの父である悪魔と完全に対立しておられるのと同じです。

そこで蛇は女に言った。「あなたがたは決して死ぬことはない。」(創世記 3 章 4 節 /NKJV 訳)

「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であり、自分の父の欲望を行いたいと願っている。彼は初めから人殺しであり、真理に立っていない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを語る時、自分自身から語るのである。彼は偽り者であり、偽りの父だからである。」(ヨハネ 8 章 44 節 /NKJV 訳)

疑いなく、偽りの中には、ほかの偽りよりも悪いものがあります。悪魔がエバを欺いた場合のように、他の人を欺いて害を与え、自分自身が利益を得ることを明確な目的として語られる偽りは、明らかに最悪のものです。誤った動機から生じる偽りの教えも、間違いなくこれと同じ部類に入ります。

(17) 兄弟姉妹たちよ、あなたがたが学んだ教えに反して、分裂を引き起こし、あなたがたの前につまずきとなるものを置く者たちを警戒するよう、私は勧める。そのような者たちから離れなさい。(18) そのような者たちは、私たちの主キリストに仕えているのではなく、自分自身の欲望に仕えているからである。彼らは巧みな言葉とへつらいによって、純朴な人々の心を欺く。(ローマ 16 章 17-18 節 /NIV 訳)

また、信者がある情報を明らかにすることによって他の人々に害が及ぶため、それを明らかにすることが間違いとなるような状況もあり得ます。ヘブル人の赤ん坊を殺すことを拒み、その後、自分たちと赤ん坊たちを守るためにパロに事実とは異なることを告げた助産婦たちは、聖書の中で非難されていません。それどころか、その結果、彼女たちは神から祝福されました(出エジプト 1 章 15-21 節)。同様にラハブも、イスラエル人の斥候たちに忠実であり、彼らを守るために事実とは異なることを告げたことによって祝福されました(ヨシュア 2 章 3-6 節; ヘブル 11 章 31 節; ヤコブ 2 章 25 節参照)。ヤエルがシセラを欺いたことも、同じように聖書によって称賛されています(士師 5 章 24 節)。また、アヒトペルの良い助言を打ち破るために、フシャイがアブサロムに良くない助言を与えたことは、文字どおり祈りへの答えでした(第二サムエル 15 章 35 節)。これらの例や同様の事例すべてに共通しているのは、そのような誤解を招く言葉が、悪い目的のために善良な人々を欺こうとしたものではなく、悪い人々が善良な人々に害を加えるのを防ぐためのものであったということです。そして、善良な人々を悪から守ろうとした人たちは、そのために大きな危険を冒していたのです。

そのように、真実を報告すれば罪のない人々を危険にさらすことになるため、悪い権力者に対して報告を迫られるような切迫した状況でない場合にも、信者は、不信者の世と接する際に、何もかも包み隠さず、独善的なまでに「正直な」答えをすることが、一般に求められているわけではないことを覚えておくべきです。私たちは世間話をしなければならぬわけではありませんし、状況によって必要であれば、多くを語るよりも少なく語ることができます。例えば、ある人の服装について、自分にはなぜ魅力的に見えないのかを事細かに説明する必要はありません。また、出されたばかりの食事について、自分にはなぜおいしくなかったのかを詳しく説明する必要もありません。他の人の気持ちを傷つけないように、ある程度配慮して言葉を選ぶことは許されており、聖書にもかかっています。

(4) 愛は耐え忍ぶ。愛は尊いことを行う。愛はねたまない。むなしく自慢せず、高ぶらない。(5) 恥ずべき振る舞いをせず、自分の利益を求めず、容易に怒らず、

恨みを抱かない。(6) 悪を喜ばず、真理と共に喜ぶ。(7) [守るべきもの(すなわち、秘密に属するもの)を]すべて守り、[信じるべきものを]すべて信じ、[望むべきものを]すべて望み、[耐えるべきものを]すべて耐える。(第一コリント 13 章 4-7 節)

ここでどこに線を引くかは、個人の良心と状況による問題であり、律法主義的な公式に還元することはできません。しかし、他の信者との関係について言えば、御言葉の真理と、私たちがこれほど大切にしている聖書の原則を守ることが問題となる場合には、いつでも、どこでも、心から完全に真実を語ることが絶対に必要です。

それゆえ、あなたがたはそれぞれ偽りを捨て、隣人に真実を語りなさい。私たちは皆、一つのからだの肢体だからである。(エペソ 4 章 25 節 /NIV 訳)

互いに偽りを言ってはならない。あなたがたは古い人をその行いと共に脱ぎ捨てたのだからである。(コロサイ 3 章 9 節)

愛があるところには、御霊がおられます。動機が利己的であるところでは、あらゆる欺きは悪しき者から出たものです。

(13) あなたがたのうちで、知恵があり、物事をわきまえている者はだれか。その人は、良い行いによって、そのわざが知恵から来る柔和さをもってなされていることを示しなさい。(14) しかし、もしあなたがたの心の中に苦いねたみと利己心があるなら、誇ってはならない。また、真理に逆らって偽ってはならない。(15) そのような知恵は上から下って来るものではなく、地上的で、肉的で、悪霊的なものである。(16) ねたみと利己心のあるところには、混乱とあらゆる悪い行いがあるからである。(17) しかし、上からの知恵は、まず純粋であり、次に平和を好み、優しく、従順で、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善がない。(ヤコブ 3 章 13-17 節 /NKJV 訳)

悪から離れて善を行うこと：悪から離れるために自分を否むことが、正しく良いことを行うこと(自分の十字架を負ってイエス・キリストに従うこと)よりも先に置かれているのには、十分な理由があります。もし私たちが悪、すなわち神が忌み嫌われるものを受け入れているなら、「善を行う」こと、つまり神が私たちに望んでおられることを行い、霊的成長、前進、そして霊的な実を結ぶことに献身し、それを実行することはできません。神と悪魔の両方に同時に仕えることはできないのです。

あなたがたは、主の杯と悪霊どもの杯の両方を飲むことはできない。主の食卓と悪霊どもの食卓の両方にあずかることはできない。(第一コリント 10 章 21 節 /NKJV 訳)

信者は、クリスチャン生活のごく初期にこのことを知るようになります。そして、「霊的な罪への逆戻り」には、必ず神からの懲らしめが伴います。

どのような懲らしめ(すなわち、神からの懲らしめ)も、それを受けている間は喜ばしいものではなく、むしろ悲しいものである。しかし、後になって、それによって訓練された人々には、平安に結びつく[個人的な]義の実(すなわち、神との関係において健全さと完全さが回復された状態)を結ばせるのである。(ヘブル 12 章 11 節)

主の矯正と訓練に応じる人々には、回復と霊的な力の成長があります。しかし、主の忍耐の限界ぎりぎりのところを行き来している人々は、霊的に成長せず、主が許される範囲を越えそうところまで踏み込む危険を冒しています。その結果、良くてクリスチャンとしての人生を無駄にすることになり、最悪の場合には、深刻な霊的危険に陥ることになります。悔い改めないまま「悪から離れる」ことを怠り続ければ、必然的に霊的な後退の道を進むことになり、最後には死に至る罪、あるいは背教にさえ至ります(主が次第に厳しくしていかれる懲らしめに対して、個々のクリスチャンがどのように応じるかによります)。⁸

その時、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を否み、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。」(マタイ 16 章 24 節 /NKJV 訳; 参照: マルコ 8 章 34 節; ルカ 9 章 23 節)

平和を求め、それを追い求めること: ここ第一ペテロ 3 章 11 節で「平和」と訳されているギリシヤ語 (eirēnē / εἰρήνη [エイレーネー]。人名の「アイリーン (Irene)」参照) は、これに対応するヘブル語 shalom (שָׁלוֹם [シャローム]) の標準的な訳語です。どちらの言葉も、国家間や個人間の関係において敵対関係がないことを表すことができますし、実際にその意味でも使われます。しかし、聖書における平和は、それよりもはるかに積極的な概念です。そこでは、何が存在しないか(すなわち、敵意)ではなく、国家間、個人間、そして何よりも重要なこととして、神と神に属する人々との関係が

⁸ 『聖書の基本 3B: 罪論 (Hamartiology)』の第 IV 部 6 節「背教と死に至る罪」を参照してください。

正しく保たれている状態の健全さと祝福が強調されています。この箇所の意味されているのは、最後に挙げた神と神に属する人々との関係における平和です。

(19) なぜなら、[神のご計画の]すべての成就が[キリスト]のうちに宿ることを、[神は]喜ばれたからである。(20) そして、キリストによって、その十字架の血を通して平和をもたらし、地にあるものも天にあるものも、すべてをご自身と和解させることを喜ばれたのである。(コロサイ 1 章 19-20 節; 参照: エペソ 2 章 13-18 節)

すべての人がまず求めるべき平和、すなわち関係の回復と健全さは、私たちの愛する主であり救い主である方が、私たちのすべての罪のために十字架で犠牲となられたことによって可能となった、父なる神との和解です(第二コリント 5 章 18-21 節)。⁹ 罪は神と人との間に敵対関係を生み出します。私たちを神から隔てているその敵意が取り除かれるのは、キリストの血、すなわち全人類の罪のために主が経験された霊的な死によってのみです。私たちに向けられていた神の敵意が、神の大いなる愛とあわれみに置き換えられるという、この言葉では言い表せない祝福は、イエス・キリストを信じた時点で、すべての信者に与えられます。その結果、私たちは確かに「神との平和を持っている」のです……それは、私たちがイエス・キリストに属しているからです。この平和は、救われた時に受ける多くのものと同様に、「立場上の」ものです。父なる神は、私たちが神の愛する御子と一つにされていることに基づいて、私たちを好意をもって見てくださいます。そして永遠においては、この平和は「最終的な」ものとなり、あらゆる点で完全なものとなります。しかし、この地上の人生においては、私たちが経験する平和の質と深さは、真理に対してどれほど応答しているかによって決まります。今ここでの私たちの平和は「経験的な」ものであり、その深さ、質、そして持続性は、日々の霊的成長と前進にかかっています。だからこそ、今取り上げている節は勧奨の表現(「平和を求め、それを追い求めよう」)になっているのです。これは、私たちが主のために霊的に成長し、前進し、実を結んでいくにつれて、この人生においてさらに深めることのできる祝福された平和を、積極的に求め、追い求めるよう勧めているのです。

(1) こうして、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストを通して、[私たちが]父なる神との間に[すでに持っている]平和をしっかりと自分のものにしよう。(ローマ 5 章 1 節)

⁹ 『聖書の基本 4A:キリスト論(Christology)』の第 II 部 9 節「和解」<リンク先ファイルの 263 頁-/A4 印刷本の 261 頁-を参照してください。>

上の節では、義とされること、すなわち信仰によって与えられる神の義を持つこと([ローマ 3 章 28 節](#), [4 章 25 節](#), [5 章 9 節](#), [10 章 10 節](#); [第一コリント 6 章 11 節](#); [ガラテヤ 3 章 16 節](#), [3 章 24 節](#); [テトス 3 章 7 節](#))は、信者にとってすでに確かな事実です。私たちは皆、「信仰によって義とされた」のです。しかし、神がイエス・キリストにあって私たちに与えてくださる平和を十分に自分のものとし、その恵みを十分に生かすことは、自動的に起こるわけではありません。それには信者自身の努力が必要です——ただし、それは「行い」による努力ではなく、霊的な努力です。一見すると逆説的ですが、神が私たちに与えてくださり、実際に私たちに求めてもおられる平和に入るために、信者が払わなければならない努力(これは第四の戒めが新約聖書において成就したものです)とは、自分自身の行いに頼ることをやめ、代わりに神が私たちのために働いてくださることに信頼することなのです。

(9) こういうわけで、神の民のためには、なお「安息日の休み」が残されている。(10) なぜなら、[神の]安息に入った者は、神がご自身の働きを休まれたように、自分自身の働きをやめたからである。(11) それゆえ、私たちは、あの[継続的で霊的な]安息に入るよう熱心に努めよう。そうすれば、だれも[出エジプトの世代がしたように]同じ不従順の例にならって[恵みから]脱落することがないであろう。([ヘブル 4 章 9-11 節](#))

第四の戒めは、十戒の中で唯一、新約聖書では改めて命じられていない戒めですが、上に引用した箇所はその理由を説明しています。律法の下では、特別な一日が主のためにさげられていました。それは、日々の労苦から解放され、主と共に時を過ごし、律法全体を通して象徴的に示されている主の教えに心を集中させるための日でした。しかし、律法は十字架によって廃止されました([ローマ 6 章 14-15 節](#), [10 章 4 節](#); [第一コリント 9 章 20 節](#); [ガラテヤ 5 章 18 節](#); [エペソ 2 章 15 節](#); [ヘブル 7 章 12 節](#), [8 章 13 節](#))。キリストは今や、諸時代にわたる大いなる勝利を勝ち取られました。そして主の教会は今、攻勢に転じており、私たちが召されている霊的な戦いのために、特別な備えを与えられています([マタイ 16 章 18 節](#); [エペソ 4 章 8 節](#), [6 章 12 節](#))。私たちは、一日二十四時間、週七日、攻勢に出るよう召されているのです。ラオデキヤの多くの人々が習慣としているように、守りの姿勢で座って待つのではなく、間もなく現れようとしておられる主のために実を結ぶよう召されているのです([ルカ 12 章 36 節](#); [第二コリント 5 章 10 節](#); [テトス 2 章 13 節](#))。したがって、私たちの「安息」は、文字どおりの一日の休みではありません。私たちの安息は、絶えず続くものであるべきです。それは、主が私たちに望んでおられることを行うのをやめることなく、自分自身を主の御手に委ね、イエス・キリストが私たちに毎日求めておられる、熱心な霊的成長、前進、そして実を結ぶ働きにおいて、御霊に力を与えていただくことなのです。『今日』

と呼ばれている間に」([ヘブル 3 章 13 節](#); [詩篇 118 篇 24 節](#); [第二コリント 6 章 2 節](#) 参照)、私たちはこのように歩むべきです。そして、最も大きな報いが与えられるのは、御霊を通して主に応答し、主に用いていただくために自分自身をささげようとする人々であることを忘れてはなりません([ローマ 6 章 13 節](#), [6 章 19 節](#), [12 章 1-2 節](#); [ガラテヤ 5 章 16-18 節](#))。

なぜなら、[御霊を通して]あなたがたのうちに働き、[正しいことを]願う思いを起こさせ、またそれを実行する力を与えて、御心にかなうことを成し遂げさせてくださるのは、神だからである。([ピリピ 2 章 13 節](#))

(28) 私たちはこのキリストを宣べ伝え、あらゆる知恵をもってすべての人を戒め、すべての人を教えている。それは、すべての人をキリスト・イエスにあって完全な者として御前に立たせるためである。(29) このために、私も労苦し、私のうちに力強く働いておられる主の働きに従って、力を尽くして奮闘している。([コロサイ 1 章 28-29 節](#) /NKJV 訳; 参照:[第一コリント 15 章 10 節](#); [エペソ 3 章 9 節](#))

自分の人生を完全に主の御手に委ね、主のうちに安息し、自分自身の努力について思い煩うことをやめ、主に重荷を担っていただく人々には([詩篇 37 篇 5 節](#); [第一ペテロ 5 章 7 節](#); [マタイ 11 章 29-30 節](#) 参照)、この人生の嵐のただ中にあっても、真の内なる平安が与えられます([マタイ 8 章 23-26 節](#))。私たちは主を信頼し、その信頼に従って最後まで歩み続けることによって、この平安を得て、保ち続けるのです。

あなたに思いを堅く向けている者を、あなたは完全な平安(実際には「二重の平安」)のうちに守られる。その者があなたに信頼しているからである。([イザヤ 26 章 3 節](#) NKJV; 参照:[イザヤ 30 章 15 節](#))

(6) 何事も思い煩ってはならない。ただ、あらゆることにおいて、感謝をもって祈りと願いをささげ、あなたがたの求めることを神に知らせなさい。(7) そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いを守るであろう。(8) 最後に、兄弟たちよ、すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いこと、何か徳とされること、何か称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。(9) あなたがたが私から学び、受け、聞き、また私に見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたと共にいてくださる。([ピリピ 4 章 6-9 節](#) /NKJV 訳)

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。あなたがたは、一つのからだの一員として、平和にあずかるよう召されたのだからである。また、感謝する者となりなさい。(コロサイ 3 章 15 節 /NIV 訳)

これらの聖句やほかの多くの聖句は、クリスチャンにとって、平安のうちにいることが本来の「自然な」状態であるべきことを明らかにしています(たとえば、[イザヤ 26 章 3 節](#), [57 章 2 節](#); [ヨハネ 14 章 27 節](#); [ローマ 5 章 1 節](#); [エペソ 2 章 14 節](#); [ピリピ 4 章 7 節](#); [第二テサロニケ 3 章 16 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#)参照)。私たちは、シオンへ向かう旅路において、週のうちの一日だけでなく、一步一步進むそのすべての時に主のうちに安息するという、新しい第四の戒めを実践していくべきなのです。

それゆえ、神の安息に入るという約束がなお残されているのだから、あなたがたのうちのだれかが、それに達しなかったということのないように、恐れをもって注意しようではないか。(ヘブル 4 章 1 節 /NKJV 訳)

主の目：

「主の目は義人たちに[彼らの益のために]向けられ、その耳は彼らの祈りに開かれている。しかし、主の御顔は悪を行う者たちに向けられている。」([第一ペテロ 3 章 12 節](#))

主は義人たちに好意を向けられますが、悪を行う者たちには敵対されます。この分かりやすい命題には、信者は皆「信仰によって義とされ」、それゆえに神の義を持つ義人なのだから(たとえば、[ローマ 4 章 1-5 節](#))、正しく義にかなったことを行うはずであり、悪を行って神の怒りを招くのは不信者だけである、という前提が含まれています。ここで神から与えられている私たちの「務め」にふさわしい生き方をしていない信者は、自分自身を重大な危険にさらしている、と結論づけるのは難しいことはありません。

(7) 子たちよ、だれにも惑わされてはならない。義を行う者は、キリストが義であられるように、義なる者である。(8) 罪を行う者は悪魔に属している。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の御子が現れたのは、悪魔の働きを滅ぼすためである。(9) 神から生まれた者は、だれも罪を犯し続けることはない。神の種がその人のうちにとどまっているからである。その人は神から生まれたので、罪を犯し続けることができないのである。(10) 神の子たちと悪魔の子たちは、このことによって明らかになる。義を行わない者はだれも神の子ではない。また、自分の兄弟姉妹を愛さない者も同様である。(第一ヨハネ 3 章 7-10 節)

/NIV 訳)

私たちはこれまで何度も、この地上で罪の性質を持つ肉体に宿っている限り、だれも罪から完全に解放されることはなく、そうでないと主張するのは偽りであることを確認してきました([第一ヨハネ 1 章 8 節](#), [1 章 1-10 節](#))。しかし、幸いなことに、神は私たちが罪に陥ったときにはいつでも清めを受けるための手段を備えてくださっています。それは、自分の罪を主に直接告白することです([第一ヨハネ 1 章 9 節](#); [詩篇 32 篇 6 節](#) 参照)。イエス・キリストはすでに全人類のすべての罪のために死なれ、それによって、すべての人が救われる道を開き、すべての信者がいつでも神との交わりを回復できるようにしてくださいました。主は私たちの弁護者なのです([第一ヨハネ 2 章 1 節](#); [ローマ 8 章 26 節](#), [8 章 34 節](#) 参照)。この文脈における「悪を行う者たち」とは、信仰の良い戦いを戦い、時折つまづいたときには罪を告白している信者のことではありません。むしろ、「悪を行う者たち」とは、考えること、語ること、行うことにおいて善に敵対し、甚だしく罪深い行為や暴力的な行為によって神に逆らっている、あらゆる人々のことです。もし信者がこの後者の部類に入ってしまうなら、悔い改めない限り、やがて最終的な神の懲らしめである「死に至る罪」による裁きを受けることになります。ただし、主からの懲らしめがますます厳しくなる中で、その人が信仰を完全に捨ててしまう場合は別です。

10

このように、キリストにあって正しい行いを捨てることの恐ろしさは明白であり、私たちに厳粛な思いを抱かせます。しかし、私たちが立場上持っている義にふさわしく、実際の行いにおいても義を実践して主に従うことには、非常に大きな祝福があります。主の目は私たちの益のために注がれており、主の耳は私たちの祈りに開かれているのです。「主の目が私たちに注がれている」とは、私たちが主の望まれるように歩んでいるとき、神が私たちの人生を御手のうちに導き、見守ってくださることを意味します(詩篇 90 篇 1 節以下 <[詩篇 91 篇](#) の誤記と思われます>)。また、「主の耳が私たちの祈りに開かれている」とは、私たちが必要な助けを求めるときにはいつでも、その助けが与えられると約束されていることを意味します([マタイ 7 章 7-8 節](#))。この二つの祝福が互いに結びついていることは明らかなです。なぜなら、神は私たちに何が必要かを前もってご存じであり、私たちが求めなくても必要なことをしてくださるからです。そして、これらの祝福はすべて、神のご計画の中であらかじめ定められているのです。しかし、このように心に深く響く、具体的な形で表現されていることは、私たちに大きな慰めを与えてくれます。私たちには、いつも私たちを気遣い、見守ってくださる天の父がおられる

¹⁰ 『聖書の基本 3B:罪論(Hamartiology)』の第 IV 部 6 節「背教と死に至る罪」<英文>を参照してください。

ことを覚えておくのは良いことです。父なる神は、私たちの置かれている状況を完全に把握し、あらゆる瞬間に必要なものをすべて備えてくださっているのです。

そして、神を愛する人々、すなわち神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを共に働かせて益としてくださることを、私たちは知っている。(ローマ 8 章 28 節)

祈りが聞き届けられることは、とりわけ素晴らしく、励ましとなる祝福です。祈りはクリスチャン生活において非常に重要であり、祈りが聞き届けられることは、いつでも大きな喜びの理由となります。神は私たちの味方であり、私たちの祈りに答えてくださるのです！ ペテロは祈りの重要性をよく理解していました。少し前の節で、ペテロは夫たちに、自分たちの祈りが妨げられることのないよう、妻に対して正しく接するよう勧めていました(第一ペテロ 3 章 7 節後半)。また、この同じ手紙の後の箇所では、終わりの時が近づいているからこそ、祈りに関して慎み深く、節度を保ち続けることがますます重要であると、当時の読者にも今日の私たちにも強く教えています。

万物の終わりが近づいている。だから、祈りのために、思慮深く、慎みをもって自分を制しなさい。(第一ペテロ 4 章 7 節)

クリスチャン生活において霊的に成熟し、前進することによって主に近づいていくとき、私たちが経験する最も素晴らしく祝福されたことの一つは、主との親密な交わりと、主が私たちの祈りを聞いてくださっているという確信がますます強くなることです。

(14) 私たちが神に対して抱いている確信は、私たちが何事でも御心に従って願うなら、神は聞いてくださるということである。(15) そして、私たちが何を願っても神が聞いてくださると知っているなら、神に願い求めたものをすでにいただいていることも知っているのである。(第一ヨハネ 5 章 14-15 節 /NKJV 訳)

善を行うことに熱心であること：

(13) そして、もしあなたがたが[神の目に]良いことすべてを[本当に]熱心に求め、[その願いに従って生きて]いるなら、だれがあなたがたに害を加えようとするだろうか。(14) しかし、たとえ正しいことを行っただけのために苦しむことになっても、あなたがたは幸いである。「彼らが恐れるものを恐れてはならない。おびえてはならない」(イザヤ 8 章 12 節)。(第一ペテロ 3 章 13-14 節)

もし私たちが、神が善とみなされることに熱心であるなら(ここでの文字どおりの意味は「熱心な支持者」です)、すなわち、神が忌み嫌われることを避けるだけでなく、霊的成長、前進、そして実を結ぶことにおいて、神が望まれることを一貫して行っているなら、通常は、権威を持つ人々や上司、あるいは私たちが接するほかのだれかと問題を起こすことはないと期待してよいのです([ローマ 13 章 3 節](#)参照)。しかし、ヨブの例が思い起こさせてくれるように、霊的に前進している信者であっても、その霊的な状態を試され、また霊的成長を促されるために、「不当な苦しみ」を受けることがあります。

(2) 兄弟たちよ、さまざまな試練に遭うときには、それを喜ぶよう努めなさい。(3) あなたがたの信仰が試されることによって、忍耐が生み出されると知っているからである。(4) だから、忍耐を十分に働かせなさい。それによって、あなたがたは何一つ欠けるところのない、十分に成熟した者となり、完全な報いを受けるにふさわしい者となるのである。(ヤコブ 1 章 2-4 節)

試練の中で堅く立ち続ける人は幸いである。なぜなら、その人は[試されて]認められたとき、神を愛するすべての人々に[神が]約束された命の冠を受けるからである。([ヤコブ 1 章 12 節](#))

ですから、私たちが主の望まれることを行い、あらゆる悪から離れているなら、苦しみに直面しても確信を持つことができます。今直面しているこの困難は、私たちに対する神の御心によるものであり、神は私たちをその困難の向こう側まで無事に導いてくださると知っているからです。必要であれば、私たちの前にある海を分けて道を開いてくださることさえあるのです。それゆえ、私たちは恐れを捨てることができます。私たちの羊飼いである主が、必ず私たちを最後まで導いてくださると確信しているからです。

(3) 私が恐れるとき、私はあなたに信頼します。(4) 私は神にあって、その御言葉をほめたたえます。私は神に信頼します。恐れることはありません。死すべき人間が私に何をなし得ましょうか。([詩篇 56 篇 3-4 節](#) /NIV 訳)

(27) 何が起ころうとも、キリストの福音にふさわしく生活なさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れていてあなたがたのことを聞くだけにしても、あなたがたが一つの御霊によって堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにして共に奮闘し、(28) どのようなことがあっても、敵対する者たちを恐れずにいることを知るでしょう。これは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。そして、それは神によるものです。([ピリピ 1 章 27-28 節](#) /NIV 訳)

むしろ、キリストをあがめなさい：

むしろ、心の中でキリストを[何よりも]主としてあがめなさい。(第一ペテロ 3 章 15 節前半)

「むしろ」とは、主の御名のために苦しみ、圧迫を受けているときに、恐れに屈するのではなく、という意味です。この点について、私たちは使徒たちとその仲間たちの模範を心に留めるべきです。彼らは、主の教会のために福音を広めているという理由だけでひどい仕打ちを受けながらも、主を賛美して歌ったのです(使徒行伝 16 章 25-26 節; ペリピ 1 章 29 節参照)。

(40 節後半) 彼らは使徒たちを呼び入れてむち打ちにし、イエスの名によって語ってはならないと命じてから、釈放した。(41) 使徒たちは、御名のために辱めを受けるにふさわしい者とされたことを喜びながら、最高法院を後にした。(使徒行伝 5 章 40 節後半-41 節 /NIV 訳)

心の中で「キリストをあがめる」とは、文字どおりには、心の中で「キリストを聖別する」、あるいは「キリストを聖なる方として扱う」という意味です。それは、心の中に主との交わりのための「聖なる場所」を保ち、そこからあらゆる汚れたものを取り除くことを意味します。また、心を尽くして主を愛し、常に主に心を向け続けることを意味します。¹¹ 私たちが主と親しく歩んでいるなら、困難に直面しても喜ばずにはいられません。なぜなら、主こそが私たちにとって究極の幸せであり、私たちは主に属していることを喜ぶからです。

私はいつも主を自分の前に置いている。主が私の右におられるので、私は揺るがされることがない。(詩篇 16 篇 8 節)

私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(ペリピ 1 章 21 節)

[モーセは]目に見えない方を見続けることによって(すなわち、目に見えないイエス・キリストを心の目で見つめ続けることによって)、強くなったのである。(ヘブ

¹¹ 『聖書の基本 6A:クリスチャンの歩み(Peripateology)』の第 I 部 B.6 節「キリストに心を向けること(Focusing on Christ)」を参照してください。

[ル 11 章 27 節](#))

(1) こういうわけで、[11 章に登場する信者たちと同じように]私たちも、[人間と天使たちの両方の]これほど大勢の証人たちに取り囲まれているのだから、あらゆる妨げとなるもの、特に私たちを習慣的に悩ませる罪を捨て去り、私たちの前に定められた競走を忍耐強く走り抜こうではないか。(2) **私たちの目をイエスに向けながら**。イエスは私たちの信仰の創始者であり、完成者である。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのために、十字架の恥をものともせず耐え忍び、神の御座の右に着座されたのである。([へブル 12 章 1-2 節](#))

私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリスト、すなわち、主がどのような方であり、私たちのために何をしてくださったのか、そしてこれから何をしてくださるのかに心に向け続けることは、熱心な霊的成長に基づく霊的成熟の結果であると同時に、その成熟によって可能になることでもあります。私たちはまず、御霊が私たちの目を主に向け続けられるよう助けるために用いることのできる真理を、心の中に十分に蓄える段階に達するよう努めなければなりません。そして、そのうえで、「目に見えない方を見続ける」ことを、神にかなった生活上の優先事項としなければなりません。そのために必要な霊的成長の段階に達するよう努力し、さらに、いつも主に心に向け続けることを優先する人々にとって、この地上の人生において、これ以上に大きな喜びはありません。

(8) あなたがたは、まだ一度も主をその目で見たことがないが、主を愛している。また、今は主を見ることができないが、それでも主を信じている。それゆえ、あなたがたは、やがて来る栄光に満ちた将来を予感させる、言葉では言い表せない喜びに満たされている。(9) それは、あなたがたの信仰の目的であり目標でもある究極の賞、すなわち、あなたがたの命の救い(文字どおりには「救い」、つまり個人的な救い)を、勝利のうちに獲得することになるからである。([第一ペテロ 1 章 8-9 節](#))

いつでも答えられるように備えていなさい:

あなたがたの内にある希望について、その理由を尋ねる人にはだれにでも、いつでも答えられるように備えていなさい。([第一ペテロ 3 章 15 節](#) 後半)

この節は、キリスト教弁証論について論じる際によく用いられますが、それはもったもなことです。しかし、公の場で信仰を擁護するよう召された人のための弁証論の働き

は、一般にその召しを受けた人々に向けられたものであるのに対し、この節はすべてのクリスチャンに向けられています。未信者から私たちの希望について尋ねられたときには、私たちはいつでも喜んで、またいつでも答えられるように備えていなければなりません。すなわち、私たちのすべての罪のために死なれ、死よりも恐ろしい運命から私たちを救い出してくださった、神であり人でもあるイエス・キリストへの信仰を通して与えられる永遠の命と復活についての福音を伝える備えです。

ここで注目すべき重要な点は、文脈です。私たちの周囲にいる未信者たちは、私たちがクリスチャンであることを知っているかもしれませんが、もちろん、そうあってほしいものです。しかし、ここで彼らが私たちの持っている希望について尋ねる理由は、私たちが以前から自分はクリスチャンだと公言していたからではありません(まして、十字架像を身につけているとか、車に「WWJD(イエスならどうされるか)」というステッカーを貼っているからでもありません)。むしろ、その前の節で、私たちは苦しみと直面したとき、特にそれが不当な苦しみである場合に、大胆で勇敢であるよう教えられていました。ここが重要な点です。つまり、**本当に苦しい状況に置かれたとき**にも、クリスチャンとしての証しを失わず、落ち着きと喜びを保っていることこそが、ここで想定されている未信者たちにとって驚くべきことなのです。そして、それは実際に驚くべきことです。なぜなら、どれほど勇敢で自信に満ちた未信者であっても、不当な扱いを受けて苦しんでいるときには、恨みを抱き、仕返しをしようとする傾向があるからです。世の人々が予想するのは違う行動や反応を示すには、超自然的な助け、すなわち、霊的に成熟したクリスチャンの心に働きかける聖霊の働きが必要なのです。実際、困難な時期に、特に不当な扱いを受けているときに、「すべてを喜びとみなす」ことは、多くの信者にとって、霊的に成熟した信者でさえ、難しいことです([ヤコブ 1 章 2-4 節](#))。ですから、クリスチャンが本当にイエス・キリストを喜ばせることに心を集中し、永遠の報いを待ち望み、そのために圧迫や困難の中にあっても明らかに希望を持ち続けているという、めったに見られないようなことが起これば、周囲の人々の注意を自然に引くことになります。なぜなら、私たちの希望、私たちの「宝箱」は、この短い地上の人生の向こう側にあるからです([マタイ 6 章 19-21 節](#))。そして、その中に永遠の命を受けるよう定められている人がいれば、証しをする素晴らしい機会が生まれるでしょう。したがって、そのような機会は、何の努力もなしに与えられるものではありません。むしろ、それに先立つ霊的成長と、**そして**特に不利な状況の中で勇気をもって真理を実践することによって得られるもののなのです。

支配者の怒りがあなたに向けられても、自分の持ち場を離れてはならない。
冷静さは、大きな過ちをも収めることができる。([伝道者の書 10 章 4 節](#) /NIV 訳)

謙遜と敬意をもって：

しかし、その際には謙遜と敬意をもって行い、[そのようにして]良心を正しく保ちなさい。そうすれば、キリスト・イエスにあってあなたがたが正しく行動しているために[あなたがたを]脅す者たちも、あなたがたを悪を行う者として中傷したことを恥じるようになるでしょう。(第一ペテロ 3 章 15 節後半-16 節)

謙遜について言えば、私たちが主のために証しをするとき、上に述べた指針を覚えておくことは非常に重要です。これは私たち自身についてのものではありません。私たちは何者でもないのです。すべては、私たちが証しをしている相手のために死んでくださったイエス・キリストに関わることなのです。私たちの言葉を通して御霊が彼らに明らかにしておられる真理を受け入れるかどうかは、その人たちと主との間の問題です。彼らが真理に応答したからといって、私たちがより良いクリスチャンになるわけではなく、応答しなかったからといって、より劣ったクリスチャンになるわけでもありません。そして、他の人々が真理に応答するかどうかを基準に自分自身を評価するという間違いを、決して犯してはなりません(第一コリント 4 章 5 節)。イエスは彼らのために死んでくださいました。御霊は、彼らの心の中で真理を現実のものとして明らかにしてくださっています。そして、もし彼らが信仰をもって肯定的に応答するなら、父なる神は彼らを新しく生まれさせ、上から生まれさせてくださるのです。そのような場合、私たちは単なる「役に立たない僕」にすぎず、そもそも当然行うべきことを行っているだけなのです(ルカ 17 章 10 節)。

敬意について言えば、すべての人間には神のかたちが与えられており、神と和解するかどうか、また信仰によってイエス・キリストという賜物を受け入れるかどうかを、自分自身で決める自由意志による権利が与えられています。したがって、その人が受け入れるか拒むかは、私たちの巧みな言葉遣いや説得力によって決まるものではありません。また、受け入れたからといって自分に何か価値があるかのように考えたり、拒んだからといって自分を責めたりするべきでもありません。これはイエス・キリストに関わることなのです。ですから、証しをする機会として私たちの前に導かれてきた人々を、個人的に好ましく思うか、あるいはまったく好ましく思わないかにかかわらず、私たちは、その一人一人のためにイエス・キリストの血が流されたことを理解しています。主は彼らすべての罪のために死なれ、父なる神は彼ら全員が救われることを望んでおられるのです(エゼキエル 18 章 23 節; マタイ 18 章 14 節; ヨハネ 12 章 47 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 第二テモテ 2 章 24-26 節; 第二ペテロ 3 章 9 節)。そして、御霊は彼らの心の中で、何を選ぶべきかという問題を明らかにしてください。しかし、その決断を下

すのは、間違いなく**彼ら自身**なのです。信者は常にその事実を尊重しなければなりません。

そのような敬意を示すことには、イエス・キリストと福音に焦点を合わせ続け、関係のない問題を持ち込まないことも含まれます。証しをするとき、救いが個人の行いにかかっているかのような印象を、どのような形であれ与えるという間違いを決して犯してはなりません。また、その機会を利用して、証しをしている相手に、あれこれの罪深い行為をやめるべきだと勧めることも避けなければなりません。福音とは、文字どおり「良い知らせ」です。それは、神の恵みによって与えられる、キリストへの信仰のみによる永遠の命という良い知らせなのです([エペソ 2 章 8-9 節](#))！キリストに立ち返る人は皆、変えられます。そして、主に従い続けるなら、その後も変えられ続けるのです。神のご計画を先回りし、律法主義というパン種を混ぜ込んで福音を損なうことは、私たちの役目ではありません。¹²

こういうわけで、私たちはキリストの使節なのである。神が私たちを通して勧めておられるかのように、私たちはキリストに代わって願う。神と和解しなさい。
([第二コリント 5 章 20 節](#) /NASB 訳)

私たちが不当な扱いに対して、クリスチャンとしての品位と希望を保ちながら立ち向かい、また、イエスが望まれるように、ふさわしい謙遜と敬意をもって福音の真理の力を証しするなら、私たちに敵対する者たちが不当に私たちを中傷する口実を与えることはありません。それどころか、聖霊の力によって真理の光が私たちを通して輝き出し、だれもそれに反論できず、すべての中傷者たちは恥じ入ることになるのです。

「わたしは、あなたがたに、どんな敵対者も逆らうことも反論することもできない言葉と知恵を与えるからである。」([ルカ 21 章 15 節](#) /NASB 訳)

悪を行って苦しむよりも、善を行って苦しむほうがよい：

たとえ[未信者たちの手によって]苦しむことがあなたがたに対する神の御心であったとしても、悪を行ったために苦しむよりは、善を行って苦しむほうが[あなたがたにとって]よいのです。([第一ペテロ 3 章 17 節](#))

¹² 『聖書の基本 4 部 B:救済論(Soteriology)』の第 II 部 6.f 節「誤った論点(False Issues)」<英文>を参照してください。

この箇所でもっとも重要なのは、神は常にすべてのことを働かせて、完全な益となるようにしてくださるということです。神のご計画は完全です。私たちがここで与えられている神の導きに応えているなら、たとえ物事が自分たちに不利に進んでいるとしても、実際には、神が「神を愛する人々のために、すべてのことを共に働かせて益としてくださっている」のです([ローマ 8 章 28 節](#))。ですから、たとえ私たちが苦しむことが神の御心であったとしても、そこには必ず正当な理由があります。上に述べた場合、火の炉のような厳しい試練のただ中でも、私たちが揺るがずに証しを続ける姿は、未信者たちにとって驚くべきものです。なぜなら、私たちがそのような試練の中でも滅ぼされずにいるのは、何らかの超自然的な力によるものに違いないと、彼らも直感的に理解するからです([哀歌 3 章 21-23 節](#))。ペテロは、そのような状況が、私たちに主のために証しをする機会を与えることになると見込んでいます。そして、私たちの内に働く神の力に心を動かされた人々が救われることにもつながり得るのです。ヨセフは兄弟たちによって奴隷として売られ、主人の妻から不当に訴えられ、牢獄に入れられ、助けてあげた人からも忘れられてしまいました。しかし、最終的には神によって捕らわれの身から引き上げられ、エジプト全土を治める者とされたのです。

「あなたがたは私に害を加えようと企てたが、神はそれを善のために用いようとした。それは、今実現しているように、多くの人々の命を救うためであった。」([創世記 50 章 20 節](#) /NIV 訳)

III. 第三段落(18-22 節)

(18) なぜなら、キリストもまた、私たちの罪のために、ただ一度死なれたからである。正しい方が正しくない者たちのために死なれたのは、私たちが神のもとに導くためであった。キリストは[その]肉においては殺されたが、御霊によって生かされた。(19) また、[キリストは]この[同じ聖なる]御霊によって、獄に閉じ込められている[天使の]霊たち(すなわち、底知れぬ所にあるタルタロスにいる霊たち)のもとを訪れ、[彼らにご自分の勝利を宣言された]。(20) [これらは]ノアの時代、箱舟が造られている間、神が忍耐強く待っておられた(すなわち、裁きを遅らせておられた)時に、従わなかった[天使たちである]。その箱舟の中に(文字どおりには「中へ」)[一種のバプテスマとして「その中へ」導き入れられることによって]、わずかな[貴重な]人々、具体的には八人が、水を通して無事に救われた。(21) そして、今あなたがたを救っているのは、この[真の][御霊による]バプテスマなのである。[あなたがたが救われるのは]肉体の汚れを[文字どおりに]洗い

落とすことによるのではなく、イエス・キリストの復活を通して、清い良心を神に求めることによるのである。(22) [この同じイエス・キリストは]天に上られ、神の右におられる。そして、御使いたちも、権威も、権力も、すべてこの方に服従させられている。(第一ペテロ 3 章 18-22 節)

キリストもまた、私たちのために、ただ一度死なれました：

イエス・キリストは、すべての信者にとって最高の模範です(マタイ 16 章 24 節; ペリピ 2 章 6-8 節; 第一ペテロ 2 章 21 節; ヘブル 12 章 2 節; 第一ペテロ 4 章 13 節)。救われた後、この地上で私たちがなすべきことは、主に従い、主の足跡をたどり、主の模範に倣うことです。そして、そうするように召されたなら、キリストの苦しみにあずかることも含まれます(ローマ 8 章 17 節; 第二コリント 1 章 5 節; ペリピ 1 章 29-30 節, 3 章 10 節; コロサイ 1 章 24 節; 第二テモテ 2 章 12 節; 第二テモテ 3 章 12 節参照)。ペテロが上記の 18 節の冒頭で「なぜなら」という意味の言葉を用いているのは、この節とこの段落を、それまでに述べてきたことに結びつけるためです。私たち信者は、主の模範に倣って、不当な苦しみに耐えなければなりません。私たちの主ほど、受けるいわれのない苦しみを耐え忍ばれた方は、ほかにだれもいません。主は、十字架にかかられるまでの三十三年間の生涯においても、十字架に至るまでに耐えなければならなかった恐ろしい虐待の数々においても、そして何よりも、十字架につけられた後、暗闇に包まれた三時間の間に、世の罪のために死なれた時にも、苦しみを受けられました。その時、主は、あなたと私が行ったすべてのこと、そしてほかのすべての人が行ったことのために、燃えるような裁きの代価を余すところなく支払われたのです。それは、「私たちが神のもとに導くため」でした(第一ペテロ 3 章 18 節)。主は私たちのために苦しみました。唯一の正しい方が、正しくない私たちのために苦しまれたのです。私たちも、イエス・キリストへの信仰によって神の義を受けるまでは、正しくない者でした(ローマ 3 章 21-24 節, 3 章 28 節, 4 章 4-5 節, 4 章 13 節, 5 章 1 節, 5 章 8-9 節, 8 章 1 節, 9 章 30-31 節, 10 章 6 節; 第二コリント 5 章 21 節; ガラテヤ 2 章 16 節; エペソ 2 章 8-9 節; ペリピ 3 章 9 節; ヘブル 11 章 7 節)。したがって、私たちの主は、不当な扱いを受けた時にどのように振る舞うべきかについても、最高の模範です。なぜなら、罪の裁きを受けられる以前、さらには十字架へと至る一連の苦難を受けられる以前でさえ、主が耐え忍ばなければならなかった苦しみに匹敵する苦しみを経験した人は、過去にもその後にも一人としていないからです。

(20b) しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神に喜ばれることである。(21) あなたがたが召されたのは、まさにそのため(すなわち、キリストの苦しみにあずかるため)である。キリストもまた、あなたがたのために死

なれ、あなたがたがその足跡に従うようにと、模範を残されたからである。(22) 「この方は罪を犯さず、その口には偽りも見いだされなかった」([イザヤ 53 章 9 節後半](#))。 (23) ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しく裁かれる方にご自身を委ねられた。(24) キリストは、私たちが罪に対して死に、義に対して生きるようになるために、自ら私たちの罪をその身に負い、木の上で苦しまれた。その傷によって、あなたがたは癒やされたのである。
([第一ペテロ 2 章 20 節後半-24 節](#))

このように、ペテロはすでにこの点を述べていますが、ここでそれを繰り返すことによって、さらに強調しています。また、私たちの救い主が、私たちに先立って同じ道を歩まれたこと、そして主に属する者として、主の聖なる御名のために不当な扱いを受けるよう召されたなら、主の模範に倣って生きるよう努める責任があることを思い起こさせることによって、不当な苦しみに関するこの部分を締めくくっているのです。

しかし、ペテロがここで、私たちのために苦しみを耐え忍ばれたキリストの模範を再び取り上げているのは、それだけが理由ではありません。主が私たちのためにそのようにしてくださったこと、そして、私たちが神の御心によって同様の不当な扱いを受けることになった場合に、どのように振る舞うべきかという模範を示してくださったことを思い起こさせたいので、ペテロは今度は、イエスがどのようにしてそれを成し遂げることができたのかを示しています。それは、聖霊の力によってでした。これこそが、第 3 章の最後の段落で伝えられている真の意味であり、全体を貫く主題なのです。しかし、この中心的な点は、ほとんどの場合、完全に見落とされ、誤解されています。

肉においては殺され、御霊によって生かされました：

私たちが救われるためには、私たちの主が十字架上で、その肉体に私たちの罪を負わなければなりませんでした。そして、その後、主はご自分の霊をお渡しになり、息を引き取られました。しかし、主の肉体が朽ちることのないうちに、主は聖霊によって復活させられたのです([詩篇 16 章 10 節](#); [使徒行伝 2 章 32 節](#), [13 章 35 節](#))。

(3) [福音は、神の]御子についてのものである。この方は、肉によればダビデの子孫として生まれ、(4) 死者の中からの復活を通して、聖なる御霊の力により、神の御子として定められた方、すなわち私たちの主イエス・キリストである。
([ローマ 1 章 3-4 節](#))

しかし、イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊があなたがたの内に住

んでいるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたの内に住んでいる御霊によって、あなたがたの死ぬべき体をも生かしてくださいであろう。(ローマ 8 章 11 節 /NASB 訳)

主イエスをよみがえらせた方は、私たちをもイエスと共によみがえらせ、あなたがたと共に御前に立たせてくださることを、私たちは知っている。(第二コリント 4 章 14 節 /NASB 訳)

十字架に次いで、復活は人類の歴史全体において起こった、最も驚くべき、すばらしい出来事です。上記の聖句が述べているように、復活は私たちの希望の中心です。そして、死者の中からよみがえらされるという約束は、この世と現在の物質的な生活が私たちにどれほど反対のことを告げていようと、常に福音の訴えかけの中心となってきました。イエス・キリストへの信仰によって、私たち信者はもはや、この偉大な希望を持たないすべての人々に恐れを抱かせる、肉体の死という万人に共通する避けられない定めに支配されることはないのです(ヘブル 2 章 14-15 節; 第二テモテ 1 章 10 節参照)。そのため、復活の知らせは、それを聞く人々の注意を常に引きつけてきました(例えば、使徒行伝 4 章 2 節, 17 章 18 節, 23 章 6 節以下)。ですから、ペテロが、私たちの主イエス・キリストの初臨における御霊の働きを要約するに当たって、私たちが救われ、永遠の命を与えられる権利を主が勝ち取ってくださった十字架(「[その]肉においては殺されました」と対になる、もう一方の締めくくりとして、御霊のこの偉大な働き(「御霊によって生かされました」)を用いているのは、まことにふさわしいことです。

「神がお遣わしになった方は、神の言葉を語る。神は御霊を限りなくお与えになるからである。」(ヨハネ 3 章 34 節 /NASB 訳)

もちろん、御霊は私たちの主の生涯のあらゆる面において、不可欠な働きをされました。主の初臨に関するすべてのことは、聖霊と密接に結びついていました。主が母の胎に宿られたのは御霊によるものでした(マタイ 1 章 18-20 節; ルカ 1 章 35 節)。主は誕生の時から御霊に満たされておられました(イザヤ 11 章 2 節, 42 章 1 節, 48 章 16 節; ミカ 3 章 8 節; マタイ 12 章 17-18 節; 黙示録 5 章 6 節; ヨハネ 3 章 34-35 節; ルカ 1 章 15 節参照)。主は御霊によって恵みのうちに成長し、あらゆる奉仕の中でも最も偉大な奉仕のために備えられました(イザヤ 53 章 1-2 節前半; ルカ 2 章 40 節, 2 章 52 節; 詩篇 1 章 1-2 節, 16 章 8 節, 119 章 9 節参照)。その奉仕を開始される時には、御霊によって、主がその方であることが目に見える形で示されました(マタイ 3 章 16 節; マルコ 1 章 10 節; ルカ 3 章 22 節; ヨハネ 1 章 33 節後半)。また、主は試みを受けるために、御霊によって荒野へ導かれました(マタイ 4 章 1 節; マル

[コ1章12節](#); [ルカ4章1節](#))。主の奉仕は、あらゆる場面で聖霊によって力強く支えられていました(例えば、[マタイ12章28節](#); [第一テモテ3章16節](#))。そして、カルバリの十字架上で私たちのために犠牲となられたことも、御霊によってのみ可能だったのです([ヘブル9章14節](#))。¹³

このようにペテロは、キリストのためになされた御霊の究極の奇跡、すなわち主の復活を、ここで私たちが考えるべき事柄として取り上げることによって、主が地上におられた間に御霊がキリストのためになされたさまざまな働きの全体を要約し、私たちに思い起こさせているのです。それらの働きは、まさにその復活において頂点に達しました(そして、その結果として、昇天、神の右の座への着座、栄光化がもたらされました)。

「しかし、よくよくあなたがたに言うておく。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になる。わたしが去って行かなければ、助け主(パラクレートス [paraclete]、「励まし、力を与える方」)はあなたがたのところに来ない。しかし、わたしが行けば、その方をあなたがたに遣わす。」([ヨハネ16章7節](#) NIV)

(4) 賜物にはさまざまな種類があるが、御霊は同じである。(5) 奉仕にはさまざまな種類があるが、主(すなわち、イエス・キリスト)は同じである。(6) また、働きの結果にはさまざまな違いがあるが、すべての場合に、あらゆる結果を生み出される神は同じである。(7) そして、すべての[クリスチャン]に、益となるために御霊の現れが与えられている(すなわち、教会を建て上げるための賜物が与えられている)。([第一コリント12章4-7節](#))

これらすべては、同じ一つの御霊の働きであり、御霊はご自分の望まれるとおりに、それぞれの人に分け与えられる。([第一コリント12章11節](#) /NIV 訳)

上記の聖句が示しているように、聖霊という賜物こそ、教会時代に生きる私たち信者に与えられている根本的な利点です。私たちが成長し、前進し、主のために実を結ぶようにと、主から与えられた使命を果たすことができるのは、聖霊とその力、そしてイエス・キリストに属する者として聖霊から与えられる賜物によってのみです。イエス・キリストは私たちの模範です。主は聖霊によって父の御心を成し遂げられました。それには、十字架における根本的な勝利と、そこに至るまでのすべてのことが含まれます。ですから、私たちも愛する主に倣い、御霊の働きを十分に活用しなければ、主の足跡に従

¹³ 以上は簡単な要約です。初臨の期間を通して、聖霊が私たちの主のためになされた働きについての詳しい説明は、聖書の基礎:聖霊学 [BB 5: Pneumatology, section II.C, "The Example of Christ"](#)を参照してください。

って歩むことは到底できません。

神の御霊に導かれている者は皆、[真の]神の子たちである。(ローマ 8 章 14 節)

また、酒に酔ってはならない。それは放蕩につながることである。そうではなく、[聖なる]御霊によって[靈的に]満たされなさい。(エペソ 5 章 18 節)

もしあなたがたがキリストの御名のために非難されているなら、あなたがたはまことに幸いである。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまっておられるからである(すなわち、試練の中であなたがたを支えるためである)。(第一ペテロ 4 章 14 節)

聖霊は、あらゆることにおいて信者を導き、助けてくださる方です。そして、上記の最後の聖句が明らかにしているように、聖霊は、極度の試練や重圧の中で私たちを支えてくださる方でもあります。私たちの主が耐え忍ばれた苦しみに少しでも近いような、受けるいわれのない苦しみ(すなわち、この第 III 節の冒頭で取り上げた「キリストの苦しみにあずかること」)に耐えるためには、私たち信者も主と同じように、御霊の働きを十分に活用する必要があります。¹⁴ 実際、そうして初めて、前の段落で命じられていることを実行できる望みがあるのです。聖霊がイエス・キリストと共におられ、主が耐え忍ばれたあらゆる重圧や試練を通して、一步一步、主に力を与えられたように、私たちも御霊に従って歩むよう努め、御霊によって満たされ、御霊から必要なものを与えられる必要があります。そうすることによって、イエス・キリストのためにどのような苦しみを受けるよう召されても、その時々主が私たちに望んでおられることを行う力を、御霊から与えられるのです。

これこそが、ペテロの第三段落の要点であり、「御霊によって生かされました」という言葉を付け加えることによって要約されていることです。キリストは、成し遂げられたすべてのことを聖霊によって成し遂げられました。そして、私たちも同じように、聖霊によってこそ、上記の聖句(第一ペテロ 3 章 13-17 節)で述べられている、受けるいわれのない苦しみを、神にふさわしい態度で耐え忍ぶことができるのです。御霊に従い、御霊から力を与えていただくことによって、私たちの主の場合と同じように、すべての良いものが私たちにもたらされます。それには、復活とそれに伴うすべてのこと、さらに復活に先立つクリスチャン生活のあらゆることが含まれます。ただ忍耐強くあり、御霊が備

¹⁴ 聖書の基礎第五部 BB 5: Pneumatology, section II.B.3.b, "Empowerment of the Believer"と聖書の基礎第六部 BB 6A: Peripateology を参照してください。

えてくださる助けを絶えず活用するなら、¹⁵ 私たちは復活について完全な確信を持つことができます(私たちの主が、私たちのために死の苦しみを受けられた後、御霊によって復活させられたのと同じように)。それだけでなく、イエス・キリストのために生きる日々においても、私たちの内に住んでおられる神なる御霊から直接与えられる、この上なくすばらしい励ましと助けと支えを、確信をもって期待することができるのです。

(16) しかし、私は言う。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲することを行うことはない。(17) なぜなら、肉の欲することは御霊の御心に反し、御霊は肉の欲することに反対されるからである。このように両者は互いに真っ向から対立しているので、あなたがたは自分の望むことをそのまま行っているわけではないのである。(18) しかし、御霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいない。(19) さて、罪深い性質の働きは明らかである。すなわち、不品行、汚れ、放縦、(20) 偶像礼拝、魔術、憎しみ、争い、ねたみ、激怒、利己的な野心、不和、分派、そねみ、(21) 酩酊、乱痴気騒ぎ、そしてこれらに類するあらゆることである。以前にも警告したように、今も警告する。このような生き方をする者たちは、天の御国を受け継ぐことはない。(22) しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、忍耐、親切、善良、信仰、(23) 柔和、自制である。このようなものを禁じる律法はない。(24) そして、キリスト・イエスに属する者たちは、肉をその弱さや欲望と共に十字架につけたのである。(25) 私たちが御霊によって生きているのなら、御霊によって歩もうではないか。(ガラテヤ 5 章 16-25 節)

この同じ聖霊によって:

また、[キリストは]この[同じ聖なる]御霊によって、獄に閉じ込められている[天使の]霊たち(すなわち、底知れぬ所にあるタルタロスにいる霊たち)のもとを訪れ、[彼らにご自分の勝利を宣言されました]。(第一ペテロ 3 章 19 節)

私たちの主は、ご自分の人間としての霊をお渡しになり、肉体的に息を引き取られた後、ハデス、具体的には地の下にあるパラダイスへと下られました(第一サムエル 28 章 15 節, 28 章 19 節; 第二サムエル 12 章 23 節; ルカ 16 章 19-31 節, 23 章 43 節)。そこは、すでにこの世を去ったすべての信者たちが、キリストの昇天の際に第三の天へ連れて行かれるまで、迎え入れられていた場所です(詩篇 68 章 18 節; 参照: エペソ 4 章 8-10 節; ヨハネ 12 章 26 節, 14 章 1-3 節, 17 章 24 節; 第二コリント 5 章 8 節; ピリピ 1 章 23 節)。こうして主は、十字架での死から復活までの短い間、アブ

¹⁵ BB 5: 聖霊論、第 II.B.3.b.3 節「御霊によって歩むこと(霊的成長)」を参照してください。

ラハムやラザロ、十字架上の強盗、そしてそれ以前にこの世を去ったほかのすべての信者たちと、交わりの時を持たれました。その後、復活してから地上で四十日間を過ごされた後([使徒行伝 1 章 3 節](#))、父のもとへ栄光のうちに昇天される際に、十字架以前のすべての信者たちを伴って天へと上られたのです([詩篇 68 章 18 節](#); [エペソ 4 章 8 節](#); [詩篇 68 章 24-27 節](#); [ヨハネ 14 章 2-3 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [黙示録 1 章 18 節](#)参照)。¹⁶

(7) しかし、私たち一人ひとりには、キリストの賜物の量りに従って恵みが与えられている。(8) それゆえ、こう言われている。「**彼は高い所に上られた時、捕らわれていた者たちを捕らえて連れて行き**(すなわち、十字架以前の信者たちを天へ連れて行き)、人々に賜物を与えられた(すなわち、御霊と霊的な賜物を与えられた)。」(9) さて、この「上られた」という[言葉]は、彼が[それ以前に]**地の低い所**(すなわち、十字架以前の信者たちを天へ連れて行かれた場所であるハデス)にも下られたということ以外に、何を意味するだろうか。(10) 下られた方は、すべての天よりも高く(すなわち、父の住まいである第三の天へ)上られた方でもある。それは、すべてのことを成就するためであった(すなわち、十字架で勝ち取られた勝利を完成するためであった。[詩篇 110 章 1 節](#)参照)。([エペソ 4 章 7-10 節](#))

今取り上げている[第一ペテロ 3 章 19 節](#)は、私たちの主が「地の低い所」に短期間滞在された間に、底知れぬ所に閉じ込められている墮落した天使たちに対しても、十字架でのご自分の勝利を宣言されたことを伝えています。地下の世界であるハデスは、第三の天と同様に、「この被造世界に属さない」場所です。つまり、ハデスは、人類の歴史の終わりに滅ぼされ([黙示録 20 章 11 節](#); [詩篇 102 章 26 節](#); [イザヤ 13 章 13 節](#), [34 章 4 節](#), [51 章 6 節](#); [ハガイ 2 章 6 節](#), [2 章 21 節](#); [マタイ 24 章 35 節](#); [ヘブル 1 章 11-12 節](#), [12 章 25-29 節](#); [黙示録 6 章 14 節](#)参照)、新しい天と新しい地に置き換えられる([黙示録 21 章 1 節](#); [詩篇 102 章 25-26 節](#); [イザヤ 65 章 17 節](#), [66 章 22 節](#); [第二ペテロ 3 章 7-13 節](#)参照)、現在の「天と地」(創世記第 1 章の七日間に回復されたもの)の一部ではないということです。ハデスには四つの区画があります。パラダイス(「アブラハムのふところ」とも呼ばれる)、苦しみ場所(現在、死んだすべての不信者たちがいる場所)、底知れぬ所(「タルタロス」とも呼ばれ、現在、墮落した天使たちの一部が閉じ込められている場所)、そして火の池(現在はまだだれも入っていませんが、将来、すべての不信者と墮落した天使たちの「住まい」となる場所)です。¹⁷ 私

¹⁶ [聖書の基礎第 4 部 A:キリスト論](#) I.5.o.2.3.「地下のパラダイスから第三の天への信者たちの移送」<リンク先ファイルの 207 頁-/A4 印刷本では 205 頁->を参照してください。

¹⁷ [来たる艱難期第 2 部 B](#) の図「上にある水(The Waters Above)」とそれに続く解説<リンク先ファイルの 42 頁-を参照下さい>、および掲載記事「[天国と地獄の地理的構造\(The Geography of](#)

たちは、金持ちが、パラダイスと苦しみとの間に横たわる「越えることのできない大きな淵」を隔てて、大声でアブラハムと話すことができたと思っています([ルカ 16 章 26 節](#))。しかし、底知れぬ所にいる墮落した天使たちが、ハデスのほかの二つの区画のいずれかと、どれほど間接的であっても、そのような接触を持つことができるという記述はありません。そのため、私たちの主がこれらの反逆者たちにご自分の勝利を宣言するには、御霊による特別な働きが必要でした。彼らは、主の決定的な勝利について、ほかに知る手段を持たない、宇宙で唯一の被造物だったからです。そこで御霊は、主がタルタロス(底知れぬ所)へ向かわれるという、特別で奇跡的な旅を可能にされました。それは、これらの悪霊たちに、彼らの企てが今や正式に敗北に終わったことを知らせるためでした。

「神は」私たちの「神との関係」を妨げていた、私たちに対する罪状とその詳細(すなわち、私たちの罪深い性質と個々の罪)を消し去り、それを十字架につけることによって、私たちの間から「障害として」取り除かれた。[そして、十字架の勝利によって、神は][悪霊の]支配者たちと権威者たちから[その力を]奪い、[キリストにあって]彼らに対して**勝利を収め**、公然とさらしものにされた。([コロサイ 2 章 14-15 節](#))

このように閉じ込められている悪霊たちのうち、かなり多くの者は、洪水以前に人間の女性たちと関係を持ち、それによって現在の天における争いに関して神が定められた基本的な規則を破ったため、そこに投げ込まれて以来、ずっと底知れぬ所にいます([第一ペテロ 3 章 19-20 節前半](#); [第二ペテロ 2 章 4-10 節前半](#); [ユダ 1 章 5-7 節](#))。私たちの主がまばゆい光を放って彼らの前に現れた時、かつて光の被造物であった彼らが、現在自分たちを苦しめている暗闇から解放されたのは、それ以来初めてのことだったでしょう([第二ペテロ 2 章 4 節](#); [ユダ 1 章 6 節](#); [イザヤ 24 章 21-23 節](#); [ルカ 8 章 31 節](#); [第二コリント 11 章 14 節](#)参照)。しかし、それは、神のご計画を打ち破る望みが今や完全に絶たれたことを知るためだけだったのです。聖書はここで彼らを「霊ども」と呼んでいます。新約聖書には墮落した天使たちを表す別の言葉もありますが、¹⁸ここでこの言葉が使われているのには意図があります。それは、サタンに従うこれらの者たちの無力さと、聖霊の全能の力とを鮮明に対比するためです。私たちの主は、この聖霊の働きによって、この旅をなされ、勝利の宣言をされたのです。¹⁹

[Heaven and Hell](#))」も参照してください。

¹⁸ [聖書の基礎第 2 部 A: 天使論、第 II.9.6 節「墮落した天使たちの組織\(称号、階級、役割を含む\)」](#)を参照してください。

¹⁹ R・B・シーム・ジュニア大佐著『勝利の宣言 (Victorious Proclamation)』(ヒューストン、1977 年)を参照してください。

(16) 「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父はもう一人の助け主(すなわち、聖霊)をあなたがたに与え、**永遠にあなたがたと共にいるように**してくださる。
(17) それは真理の御霊である。世はその方を見ることも知ることもないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはその方を知っている。その方はあなたがたと共におられ、あなたがたの内におられるようになるからである。」([ヨハネ 14 章 16-17 節](#))

聖霊が私たちの主と共におられたように、それは主がハデスへ下られた時も、光のない底知れぬ所へ向かわれた時も同じでしたが、今すべての信者の内に住んでおられる聖霊もまた、終わりに至るまで「永遠に私たちと共に」いてくださいます。たとえその終わりが、艱難期を経て、その終わりにイエス・キリストが再臨される時にまで及ぶとしても、御霊は私たちと共に、また私たちの内にいてくださるのです。状況がどれほど暗くなろうとも、それは変わりません。

それまで(そこに閉じ込められた者たち以外には)だれも訪れたことのない場所へ、私たちの主が行けるように力を与えられたことは、驚くべき奇跡でした。そして、御霊は今も、私たちのために、また私たちを通して、毎日驚くべき奇跡を行っておられます。それは、使徒たちの時代に見られたような、人目を引く奇跡ではないかもしれませんが。しかし、信頼と忍耐を示し、真理を信じてそれを分かち合い、主と共に歩み、主に仕えることは、私たちの内に御霊がおられなければ不可能な、奇跡的な働きなのです。その中には、私たちの主がなされたように、同じ聖霊によって、普通なら到底耐えられないようなあらゆる苦しみにも耐えることも含まれます。

「よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、わたしの行うわざをも行うであろう。そればかりか、さらに大きなわざを行うであろう。わたしが父のもとへ行くからである(すなわち、聖霊を遣わすからである: [ヨハネ 14 章 16 節](#) 以下参照)。」([ヨハネ 14 章 12 節](#) /KJV 訳)

私たちの主は「[その]肉においては殺されました」が、「御霊によって生かされました」。それと同じように、私たち信者も、キリストを通して「肉に対して死に」、新しく生まれ、上から生まれ、御霊によって新しい命、永遠の命を与えられたのです([ガラテヤ 2 章 20 節](#), [6 章 14 節](#); [ローマ 6 章 6 節](#)参照)。そして、私たちの主がタルタロスで真理を宣言し、ご自分の栄光によって暗闇を照らされたように、私たちも、この暗い世にあって光を放つ灯台となり、同じ聖霊によって、あらゆる人々に真理の福音の栄光の光を宣べ伝えるべきなのです([マタイ 5 章 14-16 節](#))。

従わなかった霊ども：

〔これらは〕ノアの時代、箱舟が造られている間、神が忍耐強く待っておられた（すなわち、裁きを遅らせておられた）時に、従わなかった〔天使たちである〕。その箱舟の中に（文字どおりには「中へ」）〔一種のバプテスマとして「その中へ」導き入れられることによって〕、わずかな〔貴重な〕人々、具体的には八人が、水を通して無事に救われた。（[第一ペテロ 3 章 20 節](#)）

前述したように、ここで言及されている墮落した天使たちは、創世記第 6 章に記されている、人類の遺伝子を破滅的なまでに汚染することによって人類を滅ぼそうとした企てに関わった者たちです。ノアは「その世代の中で完全な者」でした（[創世記 6 章 9 節](#)）。これは、ノアとその家族が、悪霊の干渉によって子孫の血統を汚されていない、最後に残された人間たちの一部であったことを意味しています。悪性の感染症が大流行するように、悪霊と人間の女性との間に生まれた混血の子孫であるネフィリムを生み出した遺伝的変化は、真の人類をほとんど消滅させるほどに広がっていました。もしそうになっていたなら、メシヤが真の人間として来られることは不可能になっていたでしょう。

ノアの時代に：

この時、人類全体のために破滅を食い止めるべく立ち上がったノアの偉大さは、どれほど強調してもしすぎることはありません。第一に、ノアは、自分と自分の子供たちの血統を、いわゆる「超人」たちの血統と混ぜ合わせるように誘う誘惑や社会的圧力に抵抗しました。そして、ノアを通して、その家族全員も抵抗したのです。第二に、そしてさらに重要なことに、ノアは人類の歴史においてめったに見られないほど徹底して主に従いました（[創世記 7 章 5 節](#), [7 章 9 節](#); [エゼキエル 14 章 14 節](#), [14 章 20 節](#)参照）。

ノアはそのようにした。すなわち、神が彼に命じられたすべてのことを、そのとおりに行った。（[創世記 6 章 22 節](#) /NKJV 訳）

また、〔神は〕昔の世界を容赦せず、不敬虔な者たちの世界に洪水をもたらされたが、義を宣べ伝えたノアを、ほかの七人と共に守られた。（[第二ペテロ 2 章 5 節](#) /NKJV 訳）

信仰によって、ノアは、まだ見ていない事柄について神から警告を受けた時、敬虔な恐れを抱いて、自分の家族を救うために箱舟を造った。これによって彼

は世を罪に定め、信仰による義を受け継ぐ者となった。([ヘブル 11 章 7 節](#) /NKJV 訳)

ノアが悪しき者たちとは区別され、彼らが滅ぼされる一方で救い出されたように、私たちもノアの模範に倣う必要があります。それは、悪魔の支配するこの世で私たちを取り囲んでいる悪の洪水を、無事に通り抜けるためです。ノアが霊的に成功したのは、主の言葉に耳を傾け、それに従ったからです。同じように、私たちの霊的な成功も、神に耳を傾けることにかかっています。すなわち、私たちの内に住み、神の御言葉を通して私たちに語りかけてくださる聖霊に耳を傾けることです。そうすることによって、私たちも師であるイエス・キリストの模範に倣い、神が私たち一人ひとりに割り当ててくださった使命を果たすことができるのです。たとえそれが、主の苦しみに倣って苦しみを受けることを伴うとしてもです(そのような苦しみは、聖霊に頼らなければ耐えることができません)。

ノアは、あらゆる嘲笑や反対にもかかわらず、120 年もの歳月をかけて箱舟を造り、来たるべき危機に備えて熱心に準備しました。ノアには非常に具体的な指示が与えられていたのではないかと、言う人もいるでしょう。確かにそのとおりです。しかし、私たちにも具体的な指示が与えられています。私たちの「箱舟」とは、これから訪れる危機、とりわけ艱難期に立ち向かうために、私たち全員が達成しなければならない霊的成長のことです。そして聖書には、そのための教えや模範、励ましが豊富に記されています。もしノアが箱舟を造らなかったとしたら、どうなっていたでしょうか。考えただけでも身震いします。しかし、私たちが、これから訪れる試練に備えて霊的に成長し、前進するという、与えられた同様の務めを果たさなかったとしたら、どうなるでしょうか。特に、私たちが艱難期を耐え抜かなければならない立場に置かれたとしたら、どうでしょう。そのような失敗を考える時にも、身震いするのは当然のことです。それも、自分自身のことだけではありません。ノアは、その従順によって、自分自身だけでなく家族をも救ううえで重要な役割を果たしました。そして、私たちも同じような状況に置かれるかもしれないのです。

そこで彼らは言った。「主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたも、**あなたの家族も救われる。**」([使徒行伝 16 章 31 節](#) /NKJV 訳)

ノアとその家族は、洪水を通して「救われ」、箱舟の中で、増し続ける水の中を無事に通り抜けました。同じように、主が私たち一人ひとりの霊的な備えを用いて、これから訪れる大洪水を無事に通り抜けさせ、私たちのゆえに家族をも守ってくださるとしても、不思議ではありません([使徒行伝 27 章 24 節](#) 参照)。

神は忍耐強く待たれた：

そして神は言われた。「わたしの霊は、人が罪深い生き方を続けるのを、いつまでも忍耐して見過ごすことはない。なぜなら、これが肉の[生き方]だからである。それゆえ、人の寿命は 120 年とする。」([創世記 6 章 3 節](#))

洪水以前の文明に対するサタンへの攻撃は、ネピリムによる直接的・間接的な汚染がますます広範囲に広がるにつれて、真の人類を滅ぼす寸前にまで至りました。したがって、洪水は単に破壊をもたらすものではなく、実際には驚くほど恵みに満ちた救いだったのです。それは、あなたや私、そして将来のすべての信者にとっての救いでもありました。なぜなら、そうでなければメシヤが来られることは決してなく、私たちも救われることができなかったからです。

洪水がもたらされるまでの 120 年間の猶予期間には、神の知恵と恵みがはっきりと示されています。この裁きの延期は、ノアに箱舟を造るために必要な時間を与えただけでなく、まだ救われたいと願うすべての人に、悔い改めるための非常に寛大な機会をも与えました。神は完全に憐れみ深く、同時に完全に公正な方です。イエス・キリストはすべての人が救われるように、すべての人のために死なれました。神は、ご自分の恵みを拒む者が誰であるかを、天地創造の前から当然ご存じであったにもかかわらず、そうされたのです。そして今日の不信者たちにも、真理を拒んだことについて自分たちに全面的な責任があることを、自分自身にも他の人々にも明らかにするために、十分な長さの人生(その長さは人によって異なります)が与えられているのと同じように(その責任は最後の裁きにおいて明らかにされます)、この場合にも、神が悔い改めようとするすべての人に、悔い改めるための十二分な時間を与えておられることが分かります。何しろ、箱舟の建造は大規模な工事であり、当時の世界に住むすべての人々に広く知られていたはずで、そして、人々は間違いなく、そのことでノアをあざ笑っていたでしょう。聖書はノアを「義を宣べ伝えた者」と呼んでいます([第二ペテロ 2 章 5 節](#))。そして、いわば箱舟そのものがノアの「説教」であったと考えることができます。それは、神の力と臨在を目に見える形で示すものであり、神の助けがなければ、そのような箱舟を造ることは到底不可能だったに違いありません。

信仰によって、ノアは、まだ見ていない事柄について神から警告を受けた時、敬虔な恐れを抱いて、自分の家族を救うために箱舟を造った。これによって彼は世を罪に定め、信仰による義を受け継ぐ者となった。([ヘブル 11 章 7 節](#) /NKJV 訳)

ノアの家族だけが応じたという事実は、ノアの働きの価値を否定するものでも、裁きを遅らせて十分な警告を与えられた神の恵みを否定するものでもありません。むしろ、その両方が正しかったことを裏づけています。聖霊が、しばしば語り継がれるこの一連の奇跡のあらゆる面で重要な働きをされたことは明らかです。ノアに対する最初の命令から、箱舟の建造、動物たちの集合、洪水が起こった時の箱舟の中にいるすべての者の保護、そして洪水が引いた後に箱舟から出る最後の時に至るまで、聖霊はすべてを導き、必要な力を与えられました。ノアが成し遂げたことは、聖霊によってのみ可能だったのです。同じように、私たちの誰もが、主から命じられたことを成し遂げられるのは、聖霊によってのみです。特に、大きな圧迫や苦しみを伴う時や状況において、私たちの主の模範に倣うためには、なおさらそうです。そして、「世の終わりに臨んでいる」私たち(第一コリント 10 章 11 節)が、これから訪れる艱難期に適切に備え、それを耐え抜くことができるのも、聖霊によってのみなのです。来たるべき大災害に備えて、主から命じられたとおりに忠実に準備したノアの従順こそ、ことわざになるほど広く知られるべきものです。その従順を示すものにすぎない箱舟以上に、ノアの従順そのものが重視されるべきなのです。現在、地上に生きている私たち信者には、これから起こることに備えるための時間が、ノアに与えられた時間よりもはるかに少なくなっています。しかし、ノアと同じように、私たちも**どのように**備えるべきかを確かに知っています。それは、真理によって霊的に成長し、前進することです。私たちの洪水が押し寄せる時、ノアが備えていたように、私たちも備えができているようにと願います。

(1) さて、兄弟たちよ、その時と時期(すなわち、終末の時系列と、その中で起こる個々の出来事)については、あなたがたに書き送る必要はない。(2) なぜなら、主の日(すなわち、艱難期を経て到来する再臨)が、夜中の盗人のようにやって来ることを、あなたがた自身がよく知っているからである。(3) 人々が「平和だ!」「安全だ!」と言っているまさにその時、妊婦に陣痛が襲いかかるように、突然、滅びが彼らに襲いかかる。(4) しかし、兄弟たちよ、あなたがたは暗闇の中にいるのではない。だから、[主の]その日が盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはない。(5) なぜなら、あなたがたは皆、光の子であり、昼の子だからである。私たちは夜の者でも、暗闇の者でもない。(6) だから、ほかの[不信仰な人々]のように眠っていないで、目を覚まし、油断せずにいよう。(7) なぜなら、眠る者は夜に眠り、酔う者は夜に酔うからである。(8) しかし、私たちは昼に属する者なのだから、信仰と愛の胸当てを着け、救いの希望(すなわち、確信)をかぶととして身に着けよう。(9) なぜなら、神は私たちを御怒りに遭わせるためではなく、私たちの主イエス・キリストを通して救いを[完全に]自分のものとするために(すなわち、復活の時に完全に得られる救いのために)定めてくださったからである。(10) キリストが私たちのために死なれたのは、私たちが目を覚ましてい

ても、眠っていても(すなわち、死んで天に召されていて)、[その復活の日に]キリストと共に生きるためである。(第一テサロニケ 5 章 1-10 節)

その箱舟の中へ:

興味深いことに、聖書の中で(創世記第 6 章と第 7 章を除けば)箱舟そのものが言及されているのは、この箇所だけです。上で参照・引用した箇所など、ほかの箇所では記憶されているのはノアです。なぜなら、重要なのはノアの信仰による勝利であって、その信仰が目に見える形で表されたものにすぎない箱舟ではないからです(ヤコブ 2 章 14-26 節参照)。聖書を実生活に適用するという点では、以上のことから、箱舟は私たち一人ひとりの霊的成長になぞらえることができると言えます。なぜなら、信仰によって私たちの心に宿っている真理(エペソ 3 章 17 節参照)こそが、ノアの用意した箱舟を神が彼の救出の手段として用いられたのと同じように、聖霊が私たちを艱難期の中から救い出すために用いられる手段となるからです(もし主が私たちに艱難期を経験することを定めておられるならば)。²⁰

「契約の箱」という表現に使われている「箱」という言葉は、英語でもギリシヤ語でもノアの箱舟に使われている言葉と同じですが、ヘブル語では異なる言葉が使われていることに注意する必要があります(それぞれ、**אָרֹן** / 'aron[アロン]と **תִּבְיָה** / tebhah[テバー])。また、その寸法の比率も完全には一致していません。契約の箱は 2.5 × 1.5 × 1.5、ノアの箱舟は 300 × 50 × 30 で、いずれもキュビト(約 18 インチ)を単位としています。それでも、この二つの箱には共通点があります。それは、どちらもイエス・キリストを象徴しているということです。²¹

契約の箱がキリストの予型であるという象徴的意味は、より広く教えられています。今回の聖句が明らかにしているように、ノアの箱舟もまたイエス・キリストを象徴しています。ペテロはここで、ノアとその家族を、今この時代に生きる私たち信者を表すものとして用い、彼らの経験を思い起こさせることによって、私たちを導き、励ましています。ノアとその家族が、聖霊の助けによって箱舟の中へ「バプテスマを受け」、それによって、そうでなければ彼らを滅ぼしていたはずの水の中を無事に通り抜けたように、今日の私たち信者も、同じ聖霊によってキリストの中へとバプテスマを受けています(マタイ 3 章 11 節, 28 章 19 節; 使徒行伝 1 章 4-5 節; ローマ 6 章 3-5 節; 第一コリント

²⁰ 「来たる艱難期」第 7 部.III.1.「ノアと大洪水の類比」<39 頁>を参照してください。

²¹ 契約の箱の象徴的意味については、「来たる艱難期第 2B 部」の「天の神殿の予型としての地上の幕屋と神殿」を参照<リンク先ファイルの 8 頁-/A5 印刷本「来たる艱難期: 第二部 B」の 13 頁-を参照下さい>してください。

[12 章 13 節](#); [ガラテヤ 3 章 26-28 節](#); [エペソ 4 章 3-6 節](#); [コロサイ 2 章 9-10 節](#))。そして、聖霊の指導と導きに応じることによって、危険と苦難に満ちたこの世を、キリストによって無事に通り抜けさせていただくのです。

(21) さて、あなたがたと共に、私たちをキリストにあって**確かなもの**としてくださり、私たちに油を注いでくださった(すなわち、御霊を与えてくださった)方は、神である。(22) [そう、神は]また、私たちに**証印を押し**、私たちの心に御霊を保証として与えてくださったのである。[\(第二コリント 1 章 21-22 節\)](#)

(13) [キリスト]にあって、あなたがたも真理の言葉、すなわち、あなたがたの救いの福音を聞き、[そして、私が言うように]この方を信じた時、約束された御霊、すなわち聖[霊]によって**証印を押された**のである。(14) この御霊は、私たちが受け継ぐものの**保全**(すなわち、私たちの復活と報いがあらゆる面で確実に守られること)のために、その贖いが実現するまで与えられている保証であり、[永遠において]神の栄光がほめたたえられるためのものである。[\(エペソ 1 章 13-14 節\)](#)

また、神の聖霊を悲しませてはならない。あなたがたは、**贖いの日**(すなわち、復活の日。[エペソ 1 章 14 節](#)参照)のために、この御霊によって**証印を押された**のである。[\(エペソ 4 章 30 節\)](#)

私たちをイエス・キリストにあって安全に守ってくださるのは、聖霊です。私たちは、復活の時に最終的に救い出されるまで、完全な保証をもって聖霊によって「証印を押されて」います。ただし、それは私たちが聖霊の導きに従い、「キリストのうちに」とどまり続ける限りにおいてです([ヨハネ 15 章 1-8 節](#)参照)。ノアとその家族が、キリストの予型である箱舟の中で安全に守られていた一方で、もし定められた時よりも前に箱舟の外へ出ていたなら、決して安全ではなかったのと同じように、私たちも聖霊の力に頼りながら、主が再び来られる時までイエス・キリストのうちにとどまり続けなければなりません。ノアとその家族が「水の中を無事に通り抜けた」ように、私たちの主も、聖霊の助けによって私たちをご自身のうちに安全に守り、この人生を無事に通り抜けさせてくださいます。たとえそれが艱難期という大洪水を通ることになったとしてもです。ただし、それは、この世における私たちの唯一の真の助けであり希望である主を、私たちが決して捨て去らないように注意しているならば、のことです。

なぜなら、私たちは御霊によって、信仰により、義とされるという希望が実現するのを熱心に待ち望んでいるからである。[\(ガラテヤ 5 章 5 節\)](#) /NIV 訳)

(11) 次の言葉は信頼できる。もし私たちがキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなる。(12) もし耐え忍ぶなら、キリストと共に支配することにもなる。もし私たちがキリストを否むなら、キリストも私たちを否まれる。(13) もし私たちが不忠実であっても、キリストは真実であり続けられる。なぜなら、キリストはご自身を否むことができないからである。[\(第二テモテ 2 章 11-13 節\)](#)

今あなたがたを救っているバプテスマ：

そして、これと同じように、今あなたがたを救っているのは、この[真の][御霊による]バプテスマなのである。[あなたがたが救われるのは]肉体の汚れを[文字どおりに]洗い落とすことによるのではなく、イエス・キリストの復活を通して、清い良心を神に求めることによるのである。[\(第一ペテロ 3 章 21 節\)](#)

ここで使われている「バプテスマ」という言葉は、この箇所、特に 21 節について、多くの誤った解釈を生む原因となってきました。まず、(NIV 訳や NLT 訳などの訳には異議を唱えますが)ここでのギリシヤ語本文には「水」という言葉は**出てきません**。それは翻訳者による解釈であり、しかもペテロが述べていることを完全に逆転させてしまう、甚だしく誤った解釈です。ここで言及されている「バプテスマ」は、水を用いない「乾いた」バプテスマであって、水を用いるものではないからです。

(1) さらに、兄弟たちよ、あなたがたに知らずにいてほしくないことがある。私たちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、(2) 皆、雲の中と海の中で、**モーセの中へとバプテスマを受けたのである。**[\(第一コリント 10 章 1-2 節 /NKJV 訳\)](#)

上の箇所から明らかなように(また、聖書のほかの多くの例においても同様ですが)²²、聖書におけるバプテスマは、必ずしも水を伴うものではありません。文字どおりの水のバプテスマでは、あるものを別のものの中に浸すことによって、両者が何らかの形で一体となり、浸されたものが、浸された先のものと「一体のものとされる」ことになります。したがって、「モーセの中へ」のバプテスマや、聖書に記されているほかの水を用いないバプテスマは、文字どおり水に浸すことではなく、比喩的な意味で一体のものとされ

²² 例えば、「火のバプテスマ」では、不信者たちが浸されるのは水ではなく、火なのです([マタイ 3 章 11 節](#); [ルカ 3 章 16 節](#); [マルコ 1 章 8 節](#)参照; [エゼキエル 39 章 6 節](#); [ゼカリヤ 14 章 12-13 節](#); [第二テサロニケ 1 章 6-9 節](#); [黙示録 14 章 17-20 節](#)参照)。

ることを表しています。言い換えれば、イスラエルの民は「モーセの中に浸された」のですが、それは水に浸されたという意味ではありません。彼らは、モーセに与えられた祝福にあずかるために、「モーセと一つとなった」のです。彼らはモーセのゆえに滅ぼされることなく([出エジプト 32 章 10-14 節](#); [民数記 14 章 12-20 節](#)など)、モーセと共に救い出されました([出エジプト 14 章 10-15 節](#)など)。

聖書の中で最も重要なバプテスマは、もちろん聖霊のバプテスマです。これは、信じる者すべてを聖霊がキリストとの結びつきの中に置いてくださり、私たちが「キリストにあって」一つとなることを意味します。私たちは聖霊によってキリストの中に置かれることにより、特別な意味で「キリストと一体のものとされる」のです。まさにこのバプテスマこそが、この箇所でも語られているものです。²³ノアとその家族がバプテスマを受け、箱舟と一体となったものとされ、その中に入ったように、今日の信者たちもバプテスマを受け、イエス・キリストと一つのもの見なされ、キリストの中に入れられるのです。これがここでの類比です。そして、ノアとその家族が、(キリストの予型である)「箱舟の中に」いて、聖霊によってその中に安全に閉じ込められていたことにより、大洪水の破壊的な水の中を「無事に通り抜ける」ことができたように、今日の私たち信者も、「キリストの中に」いて、同じ聖霊によってキリストのうちに確実に守られていることにより、この暗い世を、必要であれば艱難期をさえも、無事に通り抜けることができるのです。これこそが「私たちを救うバプテスマ」であり、水のバプテスマではありません。実際、水のバプテスマは、今日の教会において本来行われるべきものではありません。²⁴

上で「これと同じように」(すなわち、「これと同じように、今あなたがたを救っているのは、この真の御霊によるバプテスマなのである」と訳した言葉は、ギリシヤ語の *antitypon* / ἄντιτυπον (アンティテュポン) であり、英語の「antitype (対型)」という言葉はここから派生しています。したがって、ペテロが意図的に類比を用いていることには疑いの余地がありません。しかし、それは洪水と水のバプテスマとの類比では**ありません**。少し考えただけでも、そのような類比は意味をなしません。洪水は命を滅ぼしたのに対し、ここでのバプテスマは「私たちを救う」ものだからです。そうではなく、箱舟の**中にいる**ことと、キリストの**中にいる**こととの類比なのです。後者こそが「救うバプテスマ」であり、私たちがイエスを信じた時に聖霊によって実現される、キリストとの結び

²³ [BB 第 5 部「聖霊論」第 II.B.2.b 節「御霊のバプテスマ」](#)を参照してください。御霊のバプテスマは二つの部分から成っています。一つは「御霊による」バプテスマであり、御霊が私たちを「キリストの内に」置いてくださることによって、私たちは「キリストにある者」となります(ローマ 8 章 1-2 節、および新約聖書の随所を参照)。もう一つは「御霊をもって」授けられるバプテスマであり、それによって御霊が、信じる私たちの内に住んでくださるのです。

²⁴ [聖書の基礎第 6B 部「教会論」第 II.C.3.b 節「水のバプテスマ」](#)を参照してください。

つきのことです([ローマ 8 章 9 節](#)参照)。だからこそ、ペテロは次のようにはっきり述べているのです。

……肉体の汚れを[文字どおりに]洗い落とすことによるのではなく、イエス・キリストの復活を通して、清い良心を神に求めることによるのである。([第一ペテロ 3 章 21 節](#)後半)

以上の前半部分の意味は、これではっきりしたはずですが。この節が語っているのは、水のバプテスマではなく、御霊のバプテスマです。すなわち、私たちが信じた時に、聖霊によってイエス・キリストとの結びつきの中に置かれ、それによって私たち信者が今や「キリストにある者」となっているということです([ヨハネ 14 章 20 節](#), [15 章 1 節以下](#); [ローマ 16 章 7 節](#); [第二コリント 5 章 17 節](#); [エペソ 2 章 6 節](#), [2 章 10 節](#); [ヘブル 3 章 14 節](#); [第一ペテロ 5 章 14 節](#)など)。上の節の後半部分は、これがどのように起こるのかを、信者の側から見て明らかにしています。「清い良心を神に求めること」とは、イエス・キリストに対する救いに至る信仰を神に表明することです。それは、私たちが初めてイエス・キリストに信仰を置いた時に表した、罪と死から救い出されたいという願い、過去を悔い改め、救いを切望する思いのことです。

(8) しかし、[聖書は]何と言っているか。「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口にあり、あなたの心にある」(これは、私たちが宣べ伝えている信仰の言葉のことである)。(9) すなわち、もしあなたが自分の口でイエスを主であると告白し、神がイエスを死者の中からよみがえらせたことを心で信じるなら、あなたは救われる。(10) なぜなら、人は心で信じて義とされ、口で告白して救いに至るからである。(11) 聖書はこう言っている。「彼を信じる者は、決して失望させられることがない。」([ローマ 10 章 8-11 節](#) /NKJV 訳)

救いは、行いによるのではなく、恵みにより、信仰を通して与えられるものです([エペソ 2 章 8-9 節](#))。したがって、救われるために、自分の信仰を正式に口に出して宣言したり、公に表明したりすることが要求されているわけではありません(上の箇所を律法主義的に解釈する人々の中には、そう考える人もいますが)。²⁵むしろ、信仰を表明することは、すべての信者が自然に行うことであり、特に初めて信じた時には、父なる神に対してその信仰を表すものです。これこそが、私たちの「清い良心を求める願い」です。すなわち、イエス・キリストに対する信仰と、永遠の命、そして罪と死からの救いを

²⁵ [聖書の基礎第 4 部 B「救済論」第 II.6.f 節「誤った論点 \(False Issues\)」](#)を参照してください。

望む思いを、言葉で表すことなのです。ペテロがこの節の最後に「イエス・キリストの復活を通して」と付け加えているのも、このためです。聖霊の力によってキリストが死者の中からよみがえられたことは、私たちもキリストへの信仰を通してよみがえることの証拠です。したがって、キリストの復活は福音のメッセージの重要な部分であると同時に([使徒行伝 2 章 24 節](#), [2 章 32 節](#), [3 章 15 節](#), [3 章 26 節](#), [4 章 10 節](#), [5 章 30 節](#), [10 章 40 節](#), [13 章 23 節](#), [13 章 30 節](#), [13 章 33-34 節](#), [13 章 37 節](#))、信じる私たちにとって、祝福に満ちた永遠の未来、すなわち「あの祝福された希望」([テトス 2 章 13 節](#))を待ち望む励ましでもあります。そして、その時が来るまで、私たちは、主をよみがえらせた聖霊の力によって、主の足跡に従って歩むよう努めるのです。その聖霊こそが、やがて訪れるあの偉大な日に、私たちをもよみがえらせてくださるのです。

(3) [福音は、神の]御子についてのものである。この方は、肉によればダビデの子孫として生まれ、(4) 死者の中からの復活を通して、聖なる御霊の力によって神の御子として定められた方、すなわち、私たちの主イエス・キリストである。
([ローマ 1 章 3-4 節](#))

しかし、イエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊があなたがたの内に住んでいるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたの内に住んでおられるその御霊によって、あなたがたの死ぬべき体にも命を与えてくださる。([ローマ 8 章 11 節](#) /NASB 訳)

(20) しかし、実際には[肉体の復活はないという誤った仮定とは異なり]、キリストは[確かに]死者の中からよみがえられ、眠った者たち(すなわち、主にあって死に、現在は天において中間的な状態にある者たち)の初穂となられたのである。(21) なぜなら、死が一人の人を通して[来た]以上、死者の復活もまた一人の人を通して[来なければならなかった]からである。(22) すなわち、アダムにあってすべての人が死ぬのと同じように、**キリストにあって**すべての人が生かされるのである。([第一コリント 15 章 20-22 節](#))

主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスと共によみがえらせ、あなたがたと共に御前に立たせてくださることを、私たちは知っている。([第二コリント 4 章 14 節](#) /NASB 訳)

イエス・キリスト:

[この同じイエス・キリストは]天に上られ、神の右におられる。そして、御使い

私たち、権威も、権力も、すべてこの方に服従させられている。(第一ペテロ 3 章 22 節)

ここでの補足的な説明の主題である聖霊という偉大な賜物は、私たちの主が十字架の勝利を成し遂げられ、上の節に記されているように天に昇り、栄光を受けられるまでは、遣わされることができませんでした(ヨハネ 7 章 39 節)。私たちの愛する救い主イエス・キリストは、私たちのために死なれることによって、私たちのすべての罪を取り除き、永遠の命に至る道を開いてくださっただけではありません。主はまた、聖霊のバプテスマを可能にしてくださいました。それによって、今日のすべての信者は、キリストに属する者として、キリストご自身が持つておられたのと同じ聖霊の内住を与えられているのです(エペソ 4 章 7-10 節)。これは祝福された「御霊の約束」であり、私たちを愛する主と一つにし、主によりよく仕えて素晴らしい報いを得ることができるように、一人ひとりに霊的賜物を授け、さらに、聖霊が与えてくださる助けと支えを通して、素晴らしい導きと励ましを与えてくださるものです。ただし、それは私たちが聖霊の働きかけに喜んで応じる時のことです。

「しかし、わたしはあなたがたに真実を告げる。わたしが去って行くことは、あなたがたの益になる。なぜなら、わたしが去って行かなければ、励まし主(慰め主／助言者)はあなたがたのところに来ないからである。しかし、わたしが[行くべき所へ]行った後には、その方をあなたがたのところに遣わす。」(ヨハネ 16 章 7 節; 参照:ヨハネ 14 章 22 節, 14 章 26 節, 15 章 26 節)

「こうして、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、あなたがたが今見聞きしているものを注いでくださったのである。」(使徒行伝 2 章 33 節 /NKJV 訳)

したがって、この補足的な説明の最後にペテロが述べていることは、主の模範を私たちに思い起こさせ、その模範に倣うよう勧めるだけでなく、主がどのようにしてご自分の使命を完全に成し遂げられたのか、すなわち、聖霊の導きに全面的かつ完全に応じることによって成し遂げられたことを示し、この類比を最初の主題へと結び戻しています。ここで私たちは、敬虔な行いのすべて、不当な苦しみに耐え忍んだことのすべて、そして、この困難な人生において、さまざまな重圧に耐えながら忍耐し続けてきたことのすべてが、祝福された成就に至ることを示されているのです。そして、ここでもまた、主イエス・キリストが私たちの先駆者であり、模範です。主は御霊を「限りなく」受けられました(ヨハネ 3 章 34 節)。そして私たちにも、救い主の模範に倣って、この偉大な賜物を十分に活用するという祝福された機会が与えられているのです。主の復活が私た

ちの復活を保証しているように、そしてその復活こそが、私たちが救われた時から抱いている希望、すなわち永遠の命と、墓、死、罪からの永遠の解放という希望の土台であるように、主の復活に続く昇天(「天に上られ」)、御座への着座(「神の右におられる」)、そして栄光を受けられたこと(「御使いたちも、権威も、権力も、すべてこの方に服従させられている」)もまた、主が再臨される時に、主の教会である私たちを待ち受けている祝福を示しています。私たちもまた昇るのです。すなわち、復活して主を迎えるために上げられます([ローマ 6 章 5 節](#))。私たちもまた、教会の隊列の中で、それぞれにふさわしい場所に就くのです。すなわち、再臨の時に雲の中に召集されます([第一テサロニケ 4 章 13-18 節](#))。そして私たちもまた、栄光を受けることになります。それは、聖霊の力によって、この一時的な地上の人生において霊的に成長し、前進し、耐え忍び、忍耐し続け、苦しみを経験しながら、今まさに獲得しつつある報いに伴う栄光です([ローマ 8 章 30 節](#))。

「人の子は、御使いたちを伴い、父の栄光のうちに来る。その時、人の子は、それぞれの行いに応じて、すべての人に報いるのである。」([マタイ 16 章 27 節](#))

「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて、一人ひとりに報いる。」([黙示録 22 章 12 節](#))

私たちクリスチャンが、この世の人生において、また来たるべき人生において望むすべてのことは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストと密接に結びついていきます([ヒリピ 1 章 21 節](#))。主は私たちにとってすべてのすべてであり、私たちが倣うべき模範です。主が完全にそうされたように、私たちも自分の意志を御霊の御心に従わせることを学び([イザヤ 11 章 1-3 節](#)参照)、御霊が私たちに教えてくださり、私たちがその同じ御霊によって信じるに至った真理に従い、御霊の力によって主の足跡をたどって歩むべきなのです。また、御霊から来る敬虔な熱意に燃え([第一テサロニケ 5 章 19 節](#))、御霊によって私たちの心を守ってくださる、人知を超えた平安のうちに安らぐのです([ヒリピ 4 章 6-7 節](#))。たとえ最も大きな苦しみや艱難のただ中にあっても、私たちは救い主の模範に従うのです。

「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊による」と万軍の主は言われる。
([ゼカリヤ 4 章 6 節](#))

しかし、神の御霊が本当にあなたがたの内に住んでいるなら、あなたがたは肉の支配の下ではなく、御霊の支配の下にいるのである。そして、もしキリストの御霊を持たない者がいるなら、その人はキリストに属する者ではない。([ロー](#)

[マ 8 章 9 節](#))

(14) なぜなら、神の御霊に導かれている者は皆、神の[真の]子だからである。(15) あなたがたが受けたのは、再び[滅びへの]恐れ[の状態]へと引き戻す奴隷の霊ではなく、あなたがたを神の家族に迎え入れてくださった御霊である。この御霊によって、私たちは「アバ、父よ！」と叫ぶのである。(16) 御霊ご自身が、私たちの霊と共に、私たちが神の子供であることを証ししてくださる。(17) そして、私たちが神の子供であるなら、神の相続人でもあり、キリストと共同の相続人でもある。ただし、それは私たちがキリストと共に栄光を受けるために、実際にキリストと共に苦しみを受けているならば、のことである。[\(ローマ 8 章 14-17 節\)](#)

私たちが御霊によって生きているのなら、御霊によって歩もうではないか。
[\(ガラテヤ 5 章 25 節\)](#)

なぜなら、神こそが、[ご自分の御霊を通して]あなたがたの内に働きかけ、
[正しいことを]願う思いと、それを実行する力の両方を与え、ご自身の喜ばれることを成し遂げさせてくださる方だからである。[\(ヒリピ 2 章 13 節\)](#)